

超

常探偵ほ一むず

盗撮犯はいけメン紳士!?



創作処

兔角庵

登場人物の簡単な紹介

渡無船人《わたなしはくと》

主人公であり、道化師。ITに強い。

家津千沙《いえづちさ》

多分ヒロイン。迷探偵。

安佐木風香《あさぎふうか》

千沙の友人。鬼神。

隈吉紳司《くまよししんじ》

今回の依頼人。変人。

今井自遊《いまいじゆう》

盗撮写真の仲介者（ブローカー）。

西京助《にしきょうすけ》

飛び級を繰り返してきた天才少年。

???

???



超常探偵ほーむず

File2. 盗撮犯はいけメン紳士！？

調査報告書

調査内容

女子更衣室盗撮事件の冤罪調査

調査期間

2010年 4月26日(月)
~2010年 4月30日(金)

報告者

1年S組 渡無 船人

4月下旬。天気、晴れ。気温、普通。湿度、普通。熱気、最高。

その日、俺が登校してくると、昇降口の前に人だかりができていた。

「号外ー！ 号外だよー！！」

その中心からは、男子生徒の声が聞こえてくる。

「なんとあのイケメン四天王の一人、隈吉紳司《くまよししんじ》のスキャンダルだ！」

「えー、うっそー！」「あたしファンだったのに、ちょーショッカー」

「な、なんだってー！！」

その威勢の良い声を聞いた俺は、ギャルっぽい二人組の反応に対抗意識を燃やしてみた。しかし、そんな俺のリアクションもすぐに、周囲のざわめきに埋もれていく。それもそのはず。その男子生徒の回りには、男女問わず大勢の人が集まり、口々に驚きや批判の声を上げているのだ。俺の内気ボイスで、この喧騒に勝てる訳が無かった。

そんな内気な俺こと渡無船人《わたなしはくと》は、今年の4月からここ、私立超常学園高等部に編入してきた1年生だ。だから、俺にはあの男子生徒が言っている事が全く分からなかった。イケメン四天王など言う、俺とは一生関係の無さそうなグループの事も知らないし、隈吉紳司という人間も知らなかった。

「あの隈吉紳司に盗撮の疑いだ！！」

「ああ、いつかはやると思ってたんだよなー……」 「確かに」

「そんな！ あの隈吉さんが……！？」

それでも俺は、出来る限り大胆に驚く。それが俺のライフワークだ。

とは言え、そろそろ飽きてきたのも事実だ。やはり、リアクションに対するリアクション、言わなければリアクションが無いとやり甲斐が無い。

どうやら輪の中心にいる男子生徒は学生新聞を配っている様だが、その内容は口に出している。わざわざあの人だかりに入ってまで、貰いに行く事も無いだろう。

そう判断した俺は、再度驚きのリアクションを取らなくても良い様、そそくさとその脇を通り抜けた。

それが、今回の事件の始まりだった。

放課後、俺は最近日課となった〈家津探偵事務所〉でまったりする仕事をしていた。

家津探偵事務所とは、超常学園で活動している同好会〈探偵愛好会〉の活動拠点であり、どういう訳か学校から正式に与えられた、言わば会室であった。ついでに説明しておく、探偵愛好会とは、学園生から様々な依頼を受け、それを解決する事を活動内容とする同好会だ。

はっきり言って、かなり酔狂な会だった。

しかし先日、俺はとある事件に巻き込まれ、いや、正しくは自ら巻き付き、“助手”としてこの奇特的な同好会への入会を果たしていたのだった。

勿論、助手がいるという事はその上司もいる。そしてそれが、

「先輩、今日はいい天気ですね」

「うん、そうだね～」

聞いているだけで脳が溶けそうな甘々な声の持ち主、家津千沙《いえづちさ》先輩だった。先輩はこの会の会長代理で、俺よりも一つ年上の2年生だ。先輩の身長は低く、初めて会った時には小学生かと思ってしまったぐらいだが、胸だけは大きい。いわゆるロリ巨乳体型だった。まったく、けしから……邪道にも程がある。

さらに、この先輩にはもう一つ大きな特徴があるのだが、それはまた後にしよう。それよりも先に、もう一匹の会員を紹介したい。

「なあグレイ。一枚目で8って数字が出てきたんだが、俺はどうしたら良い？」

「……やり直したら良えんとちゃう？」

それは、猫だった。赤い首輪をして、背中にグレイ型宇宙人とUFOの形をした模様を持った、三毛猫だった。しかも、その模様が光り、尻尾が二本あって、拳句関西弁を喋る、ネコ型ロボットだった。その名もずばり、グレイ。

こいつは、俺が先輩の助手になるきっかけを与えてくれた猫であり、現在は探偵愛好会で使われる身である。主に、俺専用のPCとして活躍している。自称宇宙人が『本星から取り寄せた』というその性能は折り紙つきで、最新3Dゲームのベンチマークソフトも、スイスイ動いた。

それも、地雷数最大設定のマイナススーパーの前では意味を成さなかったが。

「ちくしょう。また8かよ」

「二枚目が開けられただけでも凄い確率やん」

「かれこれ片手じゃ数えられない回数挑戦してるからな」

「5回以上やって飽きないのはマスターの凄い所や」

「既に0x20回以上だ」

「16進数とか、普通分からんで」

ふむ。宇宙的にも、16進数という概念は存在していたらしい。そしてまた、それが一般的では無い事まで認識している。

この様に、グレイは宇宙製のネコ型ロボット（自称）のくせに、妙に常識があった。一応、地球の文化風俗を収集するのが仕事らしいので、その結果なのかもしれない。

それで最近はこうしてグレイとも戯れているのだが、正直言って暇だ。暇すぎる。

探偵愛好会に入って早一週間。その間、誰一人としてこの部屋を訪ねて来た人間はいない。俺はもっとこう『来る日も来る日も怪事件の連続！』みたいな展開を予想していたのだが、この学園も案外平和らしい。

そうそう、事件と言えば今朝、校門で号外が配られていた。先輩は知っているだろうか。

そう思い、俺が先輩に声をかけようとした丁度その時、事務所の扉がノックされた。

「はい、どうぞ～」

「失礼致します」

両手を使い丁寧に扉を開けて事務所に入ってきたのは、腰までもある艶やかな黒髪を持ち、端正な顔立ちで微笑む、大正浪漫的な和服美人であった。

「あ、風香ちゃん。いらっしゃい」

「これはこれは風香様。ようこそいらっしゃいました。ささ、こちらへどうぞ」

この和服美人を、俺達は知っていた。彼女は先輩の友人で、同じく2年生の安佐木風香《あさぎふうか》先輩だ。俺からは敬意を払い、風香様とお呼びしている。何故ならこの人は、その美しい見た目とは裏腹に、人間離れした戦闘力を持っているからだ。この学校で怒らせてはいけない人、暫定一位の人物なのである。例えば今、先日風香様にフルボッコにされたグレイなどは、机の下に隠れてがたがたと震えていた。

俺は席を立ち、風香様を応接スペースへと案内しようとして、その背後にもう一人の人間がいる事に気づいた。その人物は、眼鏡をかけた男子生徒である。身長は俺と同じぐらいで、体格は痩せ型だ。首に巻かれたネクタイは先輩たちと同じ赤色で、2年生である事を表している。毒の無い顔には爽やかな笑みを浮かべており、実に人当たりが良さそうだ。

「こちら、今回の依頼人で、隈吉《くまよし》さんです」

俺の視線に気づいた風香様は、そんな説明をしてくれた。はて、どこかで聞いた様な……。

「こんにちは。僕は隈吉紳司《しんじ》と言います。すみません今日は突然」

ニコニコと柔和な笑みで挨拶する隈吉氏、思った通り腰が低く、丁寧な人だ。

「いえいえ、とんでもない。丁度暇でしたので……ゲフンゲフン。手が空いた所でしたので。ささ、隈吉さんもこちらに」

「マスター、全部言ってるで……」

震えながらも、小声でツッコミを入れてくるグレイ。なかなか律儀や奴だ。ついでに書いておくと、なぜだかこいつは、俺の事を『マスター』、先輩の事を『ボス』と呼ぶ。まあ、それは些細なことだ。

そうして二人を案内すると、既に先輩は、応接スペースでスタンバイしていた。それを確認した俺は、お茶の準備をしようと給湯スペースに向かった、のだが……。

「初めまして。わたしが探偵の——」



「ヌードモデルに興味はありますか！？」

「……………え？」「なんか凄い事言ってるー！」「あらあら」「……」

それは、突然の出来事だった。隈吉氏が机に身を乗り出して、先輩の手を握り、叫んだのだ。

先輩は、その姿勢のまま固まった。俺は、ヤカンから水が溢れる音を聞いたまま固まってみた。風香様は、困ったような笑みで固まった。グレイですら、震えが止まった。

「一目で分かりました！ あなたの身体は素晴らしい！！ 神の与えた奇跡と言っても過言では無い！ まず、その人形の様な可愛らしい頭！ もうそこだけ家に持ち帰りたいくらいです！

次に、折れてしまいそうなほど細くそして芸術的なまでに白い手足！ 今すぐにでもパーツモデルになれます！ そして何より、その年齢からは考えられない身長と乳房の極端な不釣り合い！！

女体というのは天上天下遍く世界において至高にして究極の宝！ その中でもあなたの物はかなりのレア物だ！ 服の上からでもこれだけ魅力が透けて見えるというのに、その制服の下には一体どれ程の神の奇跡が隠されているというのか！？ そしてどうして人はその奇跡を隠してしまうのか！ 見たい！ 僕はその制服を脱ぎ去った、心の扉を開け放った、あなたの身体が見たい！！

僕たちが出会ったのは、決して偶然ではありません！ これは、あなたという芸術を理解する数少ない人間として、神が与えた必然です！！ つまり探偵さん！ あなたはヌードモデルになる為に生まれてきたんです！ それこそが運命なのです！ 是非！ 是非！！ 僕

にヌードデッサンをさせて下さい！！」

そうして、隈吉氏は机に頭を付け、頼み込んだ姿勢で固まった。

正直、負けたと思った。この人は本物だ。本物の変態なのだ……！ 初対面の女性に裸を見せて欲しいと頼む、いつ逮捕されてもおかしくない変質者なのだ。

しかし何故だろう。彼に対しては不思議と、嫌悪感を抱かない。これは、彼の持つ爽やかオーラのおかげか、はたまた、彼の女体を語る姿勢に俺がネタでやるのとは次元の違う、神々しさすら感じるからか。

とは言えまさか本当に、先輩がその気になるはずが——。

「え、えっと……そこまで言うなら、考え、なくも……」

なん……だと……！？ ここでまさかのサービスシーン突入ですか！？ ちょ、ちょっと待って下さい！ まだ俺も心の準備が！

なんてね。この俺が錯乱などする訳が無い。

俺はヤカンに水を注ぎ続けていた蛇口を閉め、冷静に、場の更なる混乱を狙った。

「まあまあ先輩落ち着いて下さい。ここは代わりに俺が一肌脱ぎますから」

しかし結果的に、これが予想外の方向に働いた。俺の言葉に敏感に反応した隈吉氏は、嬉しそうに言うのだ。

「え？ 本当ですか！？ 女体には劣りますが、男体もまた神が作りし芸術！ 見たところ特徴の無い身体の様ですが、それもまた一つの個性！」

「え、いや、あの」

「こんなに素晴らしいモデルと普通の男体が同時に見つかるなんて、今日は良い日だ！」

ちょ、ちょ待てよう。一肌脱ぐというのは慣用句であって、別に服を脱ごうという訳じゃない

んですよ？ だいたいそれ以前に、隈吉氏は男の裸なんて見たいんですか？ 俺だったら嫌ですよ？ それにそんな事したら、俺もうお嬢に行けなくなっちゃうよ？ あ、でもこんな俺をお嬢に貰ってくれる人なんてどうせいないだろうしなあ……隈吉氏はヌードデッサンと言っていたし、この際この身を芸術に捧げるのも良いかな？ いや、でも所詮俺は『普通の』男体だしな……。先輩みたいに絶賛される程素晴らしいという訳でもないのに、捧げても仕方ないか……。と言うか何？ 先輩は文字に起こせば10行以上使って口説こうとしてたのに、俺はたったの2行？ 確かに俺の身体は『中肉中背の男性』とか報道されそうなくらい特徴無いけどさ。やっぱり胸？ 胸なの？ 俺も筋トレして胸筋太くしたら、素晴らしくなれる！？

こうして俺が、唐突に人生の岐路に立たされた横では――。

「え、えっと、やっぱりヌードモデルはちょっと……」

「勿体無い！ 実に勿体無い！！ あなたの様な体型を僕は生まれて初めて見たのです！ もう一度良いますが、その身長で――」

「安佐木流OMD《オンミョードー》・首狩り（弱）！」

「ぐはっ……」

「あ、ありがとう。だけど、いきなり気絶させるのはちょっと……」

実に暴力的手段によって事態は解決されていました。暴力反対です。

しかし、悩みに悩んでいた俺はそれに気付かなかった訳で。

「……く、隈吉さん。ここは一つ前衛的に葉っぱ一枚あたりからで……ってあれ？」

「……」

「渡無さんにそんな趣味がお有りとは、わたくし、知りませんでした」

「え、あの、え？」

気付けば、隈吉氏は机に突っ伏したまま微動だにせず、俺は二人の先輩から生暖かい目を向けられていた。

「や、やだな。いつもの冗談に決まってるじゃないですか。H A H A H A」

咄嗟にごまかす俺。まさか、思考が斜め上にきりもみ回転して飛んで行ったとは言えない。

「だよね。わたしの助手に露出願望があるなんて、流石にちょっと考えるところだったよ」

「H A H A H A H A。と、とりあえずお茶を煎れてきます！」

俺は逃げるようにその場を離れた。

冤罪の証明って、難しいんじゃないの？

そうしてお茶の準備をしていると、応接スペースから、復活した隈吉氏の声が聞こえてきた。だが、その内容が妙だ。

「はっ！ あれ、ここはどこ、でしょう……。暗くてよく分かりませんね」

隈吉氏は何を言っているのだろう。今日は天気も良く、開け放たれた窓からは太陽光のエネルギーがさんさんと降り注いでいるというのに。

ともかく俺は、沸いたお湯を急須に注ぎながら、聞こえてくる声にも聴力を注いだ。

「ご機嫌はいかがですか？ 隈吉さん」

「その声は、安佐木さんですか？」

「はい。そうです」

「良かった。知り合いがいて……。ここがどこだか、分かりますか？ 辺りが暗くて、僕には何も見えないのですが……」

「ここは〈家津探偵事務所〉です」

「ああ、そう言えば。部屋に入った記憶はありますね」

「はい。そして、何も見えないのは、私が今、アイマスクを付けたからです」

「ああ、なるほどそれで……。しかし何故また？ 外しても良いですか？」

「いけません」

風香様は即答した。すると、隈吉氏何かを悟ったらしく、少し落ち込んだ様に言う。

「もしかして僕、また暴走してしまいましたか？」

隈吉氏の問いに、風香様は無言の肯定を返す。

「そうですか……。それでは自重して、これは付けたままにしておきます」

その辺りまで会話が進んだ頃、俺は湯のみにお茶を回し注ぐのも終え、お盆を持って応接スペースへと戻ってきていた。

「粗茶ですがどうぞ」

「これはどうもありがとうございます」

俺が湯のみを置くと、隈吉氏はまたあの爽やかな笑みを浮かべた。だが今回は、その装着物によって、爽やか度8割減である。

隈吉氏が今つけている物。それを風香様はアイマスクだと言ったが、本当は違った。

それは、俺には理解できない複雑な模様の書かれた、一枚の御札だった。細長い短冊状のそれは、短辺同士が輪ゴムで接続されており、お遊戯で使うお面の様になっている。隈吉氏はそれを、両目が隠れるよう頭に巻かれていたのだ。輪ゴムの固定方法はホチキスなのだが、御札に針を刺してしまって大丈夫なのだろうか……。

俺はそれを横目にお茶を配り終え、助手としての定位置に着く。すると、室内だというのに鹿追帽を被った先輩が、名刺を差し出しながら話し始めた。

「改めまして。私が探偵の家津千沙です。そしてこちらは……と言っても、それでは見えません」

その声は、先程までの甘々キンキンボイスではなく、妙に芝居がかった渋めの声である。口調

も随分と代わり、どことなく英国紳士風になっていた。これこそ、そのけしから……邪道な体格に続く先輩の第二の特徴、人格変化だった。先輩は、兄から受け継いだというその鹿追帽を被ると、表面上の人格を探偵っぽくできるのだ！ 初めて見たときは二重人格かとも思ったのだが、どうやらそうでもないらしい。先輩の場合は、意識や記憶が連続したまま、口調や態度のみが変わるのだ。まったくもって、謎の体質だった。

但し、その帽子のサイズは全くあっておらず、先輩が被ると、被るというより乗せている感じになっていた。その所為で、どことなくごっこ遊び感が漂うのだが、それが逆に微笑ましかった。

さてそれで、状況は俺の紹介の途中だった。俺はそれを引継ぎ、簡単な挨拶をする。

「俺は一年の渡無船人です。趣味はネット、得意科目は理系全般、嫌いな食べ物は特にありません。嘘です。蓮根が苦手です。毎年大変です。よろしくお願いします」

「……」

「まあ、そうなのですか。蓮根は先を見通すと言われ、大変縁起が良いのですよ？」

ここに、二人の先輩の性格が表されている。千沙先輩は、人のボケを徹底的にスルーする。一方で風香様は、ツッコミを入れること無く、とにかく乗ってくる。何故なのかは、本人達に聞かないと分からない。

そういったボケ混じりの挨拶に、隈吉氏は会釈を返した。。

「ははは、家津さんに渡無君ですね。僕は隈吉紳司と言います。絵と写真を趣味にしています。どうぞ、よろしくお願いします」

その方向は壁を向いていたが、目が見えていないらしいので、仕方ない。ついでに、隈吉氏は先輩の変化や俺のボケを、笑って流す事にしたようだ。話の分かる人で助かる。

さて、これで挨拶は終わったが、この後はどう話を進めるのだろうか。なにしろ俺にしてみればこれが初めての依頼者な訳で、分からないことだらけだ。……よく考えたらこの会、新人研修みたいなものが一切無いな。なんというブラック同好会。

そんな事を思っていると、先輩がこんな宣言をした。

「初めに言っておきます。その状態では顔も見えず不安でしょうが、我々を信じて下さい。我々探偵愛好会は、全面的にあなたの味方です。我々はあなたの言う事を全て信じましょう。例えそれが、どれほど荒唐無稽な事であってもです」

これに、隈吉氏は頷いた。

なるほど。この宣言は重要だ。依頼者との信頼関係は勿論だが、それだけでは無い。これが無ければ、依頼者は自信を持って相談する事はできないのだ。何故ならこの街では、本当に荒唐無稽な事が起こるのだから。まあ、これだけ信じろと語っておきながら、依頼の裏にまで探りを入れたりするのが探偵愛好会なのだが。前回のグレイ搜索事件が、色々な意味で良い例だろう。

「それで、今日はどんな依頼ですか？」

先輩が聞くと、隈吉氏はゆっくりと、しかし力強く返した。

「僕の無実を、証明して欲しいんです」

先輩はその答えを予想していたのか、特に大きな反応も示さない。

依頼者の隈吉氏は勿論、彼を連れてきた風香様も訳知り顔だ。

そんな中、困ったのは俺である。全く話が見えて来ない。

聞くは何とか聞かぬは何とか、と言うが、聞くのは正しい権利の行使だろう。俺は多少遠慮がちに見えるように、小さく手を上げる。

「あの一、無実というと、何か冤罪を被せられているんですか？」

「舶人君、君は今朝の号外読んでいないのか？」

するとどうだろう。あの先輩は少し驚いた様に言うではないか！ それ程の事だったとは、俺はなんとこの事をしてしまったのだろう。

「申し訳ありません！！ あの人ばかりに入っていくのが億劫でつい！」

俺はテーブルに頭を擦り付け、過剰なまでに必至にあやまる。

対して、先輩は平然とした態度で対応してくれた。

「いや、別に責めてる訳ではない。ただ、我々は校内の情報を少しでも多く持つておかなければならないからね。まあ、次から気を付けてくれたら良い。顔を上げたまえ」

こんな俺を許してくるとは、先輩が天使に見え……いや、やっぱりただの探偵ごっこしてるおかしな人でした。

俺はお礼の言葉と共に起き上がると、極めて自然に話題を戻す。

「それで、今朝の号外でしたか？ 詳しく読んではいないんですけど、イケメン四天王の一人、『くまよししんじ』という人が盗撮をした、という事なら。って、あれ、たしか……ま、まさかっ！！ あなた！？」

その名を口に出した事で気づいた俺は、即刻オーバーリアクションを取る。

そうだ。今朝、俺が聞いた盗撮犯の名前はたしか、『くまよししんじ』。そして今、目の前で不気味な目隠しをされたこの人は……隈吉紳司！ つまり……！！

「同姓同名で風評被害に遭っているんですね！？」

そんな訳が無いけど。

先輩の事だから俺の戯言はスルーしてくれるだろう。と思ったら、

「……舶人君。今は依頼者の話を、真面目に、聞く時なのだよ。分かるかね？」

割と真剣な顔で怒られてしまった。しかしと言うか、やはりと言うか、先輩はこの同好会活動を真面目にやっている様だ。

「ごめんなさい」反省します。

素直に謝ると、先輩は「次からは気をつけたまえ」とだけ言って、本題に戻っていく。

「そういう訳だ。すまないが風香君、一から説明して貰えるかな？」

「ええ、構いませんよ。元よりそのつもりでしたから。そもそもの発端は、匿名の情報提供があった事でした。それによると——」

そうして風香様が語った内容をまとめると、大体こんな感じだ。

一週間前、俺たちが大宙（自称宇宙人でグレイの所有者《オーナー》）からグレイの正体について正気を疑う証言を受けていた頃、風紀委員長の元へ一通のメールが届いた。その内容は「女子更衣室の盗撮写真が取り引きされる」という物であった。これを緊急かつ重要な案件と見た委員長は、実は非常勤の風紀委員だった風香様を緊急招集、秘密裏にこれを鎮圧した。そうして参

加者を、特に主催者と思しき生徒を取調べるが、写真の出どころに関してはなかなか口を割らなかった。何人かの委員で交代しての長い取調べの後、その生徒が出した名前が――。

「隈吉紳司さんでした」

「なるほど、それで」

俺が相槌を打つと、その横で先輩が疑問の声を上げた。

「それだけでは、隈吉君が犯人扱いされる事は無いと思うが……。証言だけだろう？」

「それが、出てしまったのです……」

隈吉氏が、悲壮感のある声で言う。

風紀委員に呼び出された隈吉氏は、身に覚えの無い罪を、当然否定したという。しかしその主催者は、隈吉氏から写真を譲り受けた事の証明として、何通かのEメールを提示していた。それは、隈吉氏が写真の取引を持ちかける内容のメールだった。それにも覚えの無い隈吉氏だったが、やはり口だけでは弱い。それだけ言うのなら、と風紀委員から提案された家宅搜索を許す事にした。それどころか、自分の無実が証明できるならと、隈吉氏はこれに進んで協力した、のだが――。

「僕のパソコンから、押収された写真と同じデータが出てきたんです」

隈吉氏は頭を抱え、顔を伏せる。

「それは、かなり強力な証拠だな」

先輩はうなるが、その表情は変わらない。

「ええ。それで我々風紀委員でも、隈吉さんが犯人であると言わざるを得なくなったのです」

「なるほど、それで」

俺は再度、相槌を打つ。確かにこの状況では、隈吉氏を無実だと言うのは難しいだろう。なにせ彼には、盗撮を行う明らかな動機もあるからだ。

そうして依頼人からの説明が終わると、次は先輩の番となる。

「状況は理解しました。しかし、何点か疑問があります。まず一つ目は、風紀委員内で、隈吉氏がどの様に盗撮を行ったとされているか、と言う事です。女子更衣室の扉は、教員が管理している鍵が無いと開けられませんからね。風香君、それについては、どうなっているのかね？」

「それは、我々風紀委員でも意見が割れている所です。女生徒を騙して設置させたのではないかという人もいますし、白昼堂々入り込んだのではないかという人もいます」

「白昼堂々？ どういう事かね？」

先輩の疑問に、風香様はこう答えた。なんでも、盗撮が行われたのは今年度の身体測定日だった様で、その日は一日中、更衣室が開放されていたのだ。おかげで、多少シビアではあるものの、各クラスの合間を縫う様にしてカメラの設置と回収は可能であったとか。

「つまり逆に言えば、盗撮は誰でも可能だった、という事ですか」

「そういう事になります」「そういう事だな」

俺の言葉は、二人の先輩に同時に肯定された。

先輩はいくらかのメモを取ると、次の質問に移った。

「隈吉さん、あなたのパソコンから写真データが出てきたのですね？」

「はい、そうです」

「そのパソコンはどの様に管理されていましてか？」

「管理という程の事はしていませんが、僕は寮生ですので、自室に置きっ放しでした」

「最近、人に貸したことは？」

「有りません。ずっと部屋の中に有りましたし、部屋の鍵も肌身離さず持っていました」

「なるほど」

先輩はそれで満足したのか、次の質問に移ろうとする。まだまだ聞くべき事はあるのに、その辺りの事は分からないのだろう。流石は精密機器破壊魔、グレイをして『ボスに撫でられると悪寒が走る』と言わしめるだけの事はある。

俺はここぞとばかりに、颯爽と手を上げる。

「はいはい！ 質問、質問です！」

過剰なアピールと共に。

「はい、渡無さん」

予想通り乗ってきた風香様に指され、俺は本題に入った。

「えっとー、そのパソコンには、パスワードはかけていたんですかー？」

ちょっと小学生風に。

「勿論です。元々僕の作品管理にも使っていたので、他人に見られる訳にはいきませんでしたから」

「そのパスワードは一、類推し易かったりしませんかー？」

我ながら、ちょっとウザ過ぎると思った。

「それも考慮してランダムな文字列をパスワードに採用しましたので、大丈夫なはずですよ」

なんとコンピュータリテラシの高い人だろう。前回俺がお世話になったwatanabeさんにも見習って欲しい。

しかしそれなら、隈吉氏が学校に行っている間に何らかの手段で部屋に忍び込んだとしても、パソコンには触れない可能性が高い。あくまで、可能性であるが。

そうなる次は――。

「んーと、じゃあー、最近変なメールとか、Webページとかは見ませんでしたか？」

「うーん……。確かに僕はよくヌード画像の検索を行いますよ――」

そんな事、頻繁にしないで下さい。

「そういった怪しいサイトにつないだ事はありませんし、特に怪しいメールもありませんでしたね。勿論、怪しいプログラムを実行した事ありません」

「そっかー。OSのアップデートはちゃんとしてる？」

「ええ、毎回欠かさずやっていますよ」

素晴らしい！ 皆も隈吉お兄さんを見習おう！

しかし、怪しいメールやサイトも無くセキュリティホールを突いた攻撃も防いでいるとなると、ネットワーク越しにデータを送りつけられた可能性は低いという事か。

「ありがとね、おにいちゃん」

「ううん、良いんだよ。ぼくも頑張ってるね」

こうして最後まで、隈吉氏には付き合ってもらってしまった。なんか、すみません……。

それから、俺達のやり取りが分からなかったのだろう、目を丸くしている先輩に呼びかけた。「先輩、俺の方から以上です……あ、いや。あと一点」

質問を終わらせようとした俺は、ある事を思い出した。

「これは風香様に質問なんです、あれ、使えないんですか？」

俺は『あれ』と良いながら、この部屋に取り付けられた監視カメラを指差した。実は我が校はハイテクの塊であり、その一例として、学校中のいたる所に監視カメラが設置されているのだ。前回の事件でも活躍したこの監視カメラ網を使えば、盗撮犯を捕まえるのは容易に思えた。しかし。

「残念ながら、使用できません。あれは我々生徒ではなく、学校側が管理しています。そして、その情報は生徒に対して決して開示されません。過去数度、我々風紀委員や千沙さん達探偵愛好会から情報開示要求をした事もありますが、その全てが無視、ないしは正式な拒否を受けました」

「え？ 生徒が盗撮にあったなんていう大事件でも、だめなんですか？」

「過去の事例を見る限り、その様です。我が校の教育では、生徒の自主性を尊重しています。ですから、運営側だからこそ得られた情報を、生徒に与えるつもりは無いのかもしれませんが」

風香様は淡々と説明された。

「しかし、それならなんの為にこれが付いているんですか？」

俺の疑問に、今度は先輩が答える。

「それは、我々にも分からない。ただ言える事は、我々は監視される側であって、監視する側では無いという事だよ」

「そう、ですか……」

その答えに、俺は沈黙するしかなかった。

それから先輩は、写真販売会の参加者についてや盗撮被害にあった生徒など、細かい情報を聞いていった。そして俺が二杯目のお茶を飲み干す頃、ようやく質問タイムは終了した。

「それでは早速調査を開始しましょう。隈吉さん、風香君、そちらでも何か動きがあればすぐに連絡を下さい」

二人は先輩に返事を返し、立ち上がろうとして、止まった。

「そういえばこれを取らないと帰れ——」

「安佐木流OMD《オンミョードー》・首狩り（弱）！」

「ぐはっ……」

例の目隠しを取ろうとした隈吉氏は、またも風香様に意識を奪われ、軽々と担ぎ上げられる。それは一瞬の出来事であり、俺には、どうする事もできなかった。暴力反対。

そのまま二人は帰るのかと思ったが、扉へと向かう風香様がはたと立ち止まり、振り返った。「重要な事を伝え忘れていました。この案件、委員長は連続休暇に入る前になんとかするつもりです」

連休ということ、いわゆるゴールデンウィークの事か。今日は4月26日だが、連休前最後の授

業日は30日だ。……って、近くないですか？

「そんな！ 期間が短すぎる！！」

俺はそれを全力で表現したが、先輩はただ「やるしかないだろうな」と言うだけだった。

「本当は我々風紀委員の内部に情報を留め、時間をかけて調査する予定だったのですが、新聞部に報道されてしまってはそういう訳にはいきませんので」

そういう風香様の顔は、困ったものだと言いたげだった。

「何故情報が漏れたのかは追って調査の必要がありますが、とにかく今は、隈吉さんの無実を証明する事を優先して下さい」

「ああ、分かっているとも」

「サー！ イエッサー！」

「それから、写真は後日、わたくしの権限で可能な限りお渡ししますので、調査に役立ててください。それでは」

そうして、隈吉さんを担いだ風香様が事務所を去り、

「では、我々も行こうか」

「サー！ イエッサー！ 行くぞ、グレイ」

俺たちも、事務所を後にした。

さあ、これから探偵愛好会“助手”としての初仕事だ。

先輩がどこに行く気なのかは知らないが、とにかく着いていけば問題ない。それが“助手”だ！

途中職員室に寄った先輩が行き着いた所は女子更衣室で、俺は一人、廊下で体育座りをしていた。

本日も調査開始です

依頼を受けた翌日の放課後。今日も今日とて、俺は事務所に向かう。

『隈吉氏に盗撮の疑い』という衝撃が駆け巡ってから一日経ったが、校内はまだ、その噂で持ち切りだった。例えば今朝の事を思い出してみると。

「あの隈吉がねえ」「信じられない、と言いたいが、あいつの趣味の事もあるからな……」「隈吉君がそんな事する訳ないじゃない。きっと真犯人はいるわ」「ちくしょう。許せないな、隈吉」「これでイケメン四天王も一人減って、四人か」「空気が出来たからって、お前がそこ入る事はねえよ」「そんな事より水球しないか!」「しねえよ」

……色々気になる所はあるが、それはグレイに任せよう。

とにかく、噂話を聞いていて分かった事がある。隈吉氏を本当に犯人だと考えている生徒は、ほとんど、というか全くいないのだ。多少なりとも納得しているのは、彼の趣味を知っている人間か、いかにも「リア充爆発しろ」と言っていそうな方々だけだった。

普段、彼はどれほど善人なのだろうか。

昨日は結局、俺ひとり廊下でお留守番で、調査がどの程度進んだのかも知らされなかった。これでも助手なんだから、多少は教えてくれてもいいのに……。

とにかく、もうちょっと信頼してもらえる様に頑張るぞ！ オー！！ と決意を固めている間に、俺は事務所の扉に激突した。

も、勿論わざとだよ？ ははは……。

「おはようございます痛い」

俺は斬新な語尾で気持ちを伝えつつ、挨拶をして扉を開けた。

事務所の中は、大体いつもと変わらない。奥に長いこの部屋で、扉を開けてすぐ目に着くのは、応接用のソファとテーブルだ。その奥には目隠し用のパーティションが部屋を横断し、その向こうには探偵と助手のそれぞれのデスク、そして資料棚がある。

ただいつもと違うのは、既に探偵セットを装着した先輩が、ソファに座っている事だった。

俺は直ちに、手持ちのリアクションリストの中から、戸惑いを選択する。

「ど、どうしたんですか……？ いきなり完全装備で」

「今日は聞き込みに戻ろうと思ってね。目的の生徒達に先に帰られてしまっては困る。君もすぐに準備したまえ」

先輩がぶかぶかの鹿追帽を被ると、その性格を探偵っぽくできるのは既に説明したと思う。それに加えて、先輩はもう一つの探偵装備を持っていた。それは、インバネスコートと呼ばれるものであり、それも装備した先輩は正に、名探偵シャーロック・ホームズ、のコスプレ、をしようとして失敗した少女、といった容貌だった。なぜなら、そのインバネスコートもまた先輩には大きすぎ、ぶかぶかだったからだ。ちなみにこのコートは、様々な小道具を持ち歩く為の物であり、鹿追帽と違って、先輩自身に影響を与える事は無かった。

強いて言えば、先輩の誇る豊かな御胸が隠されて、ただのロリ探偵になるくらいか。

「は、はあ、わかりました」

俺は口では戸惑ったフリをしつつ、先輩を待たせてはいけないと、体は素直に動かす事にした

。しかし準備と言っても、俺は先輩の様に着替えを必要としない。せいぜい、荷物を席に置き、記録デバイスとしてグレイを持っていくぐらいだ。前に言った通りこいつはロボットなので、映像や音声の記録はお手の物。さらに、そこから文字に起こす所までやってくれるので、大変重宝する。これから。

「という訳だからグレイ、行くぞ……っておい」

俺がパーテーションの裏に入ると、グレイはその四肢を力なく伸ばし、背中の模様を点滅させていた。以前もらった説明書によれば、たしかこれは、通常のスリープモードだったか。

まったく、人が真面目に授業を受けて来たというのに、いいご身分だ。

俺はそのままグレイを抱き上げ、荷物を抜いたカバンの中に放り込む。

さあ、これで準備は完了だ。戸惑っている設定はそのままで、早く表に出よう。

「お、お待たせしました」

「よし、では行こうか」

かくして俺は、事務所に入って数分とせず、そこを出る事となった。

その日俺達はまず、写真の販売会を主催した今井自遊《いまいじゆう》という生徒を訪ねて、写真部の部室へと向かった。道中、ぶかぶかのコートにぶかぶかの帽子を被った先輩は注目を集めていたが、それは無視する事にした。俺は声をひそめて、先輩に聞く。

「先輩はやっぱり、この今井さんが怪しいと思ってるんですか？」

やや間があって、先輩は答える。

「ああ、そうだな。隈吉さんが犯人でないとしたら、彼に罪を擦り付けようとしている者がいるという事だ。それで一番得をするのは、今井をおいて他に無い。もっとも、彼自身が真犯人なのか、別の黒幕がいるのかは分からないがね」

「まずは話を聞いてみないと分からない、と」

「そういう事だ。さあ、着いた」

先輩が立ち止まったので、横を歩いていた俺は気づかない振りで数歩歩き、慌てて戻った。そんな細かいボケに対し、先輩は貫禄のスルーを見せる。

「準備は良いかね？」

「えっと……」

カバンを覗き込むと、グレイはまだお休み中だ。

「万端です」

俺は、カバンをぶんぶん和不規則に振り回しながら答えた。

「では、行こうか」

俺達が部室の扉を叩くと、一人の生徒が顔を出す。その生徒は小太りで眼鏡を掛けており、いかにもインドア系の人間、悪く言えばオタク特有のオーラを発していた。どちらかと言うと俺もそっち側な訳で、あまり人の事は言えないが。

そうして顔を出した生徒は、先輩の格好を見て啞然としてしまう。まあ、無理も無いだろう。こんなちびっこ先輩が、ぶかぶかの帽子をかぶり、ぶかぶかのコートを羽織っているのだから。しかも学内で。

とは言え、こうしてはらちが明かない。要件はこちらから切り出す事にした。

「突然すみません。我々探偵愛好会の方向から来たものですが、今井さんはいらっしゃいますでしょうか」

俺は徹頭徹尾、低姿勢を装ってみる。変なコスプレをした小さな女の子が目の前に現れれば、誰だって困惑する。そこをフォローするのが、助手の仕事なのだ。多分。

「あ、僕が今井ですが……」

「貴様が今井か！」

「ひっ!？」

一転、俺は強気に出た。流石の俺も、無実の罪を着せようとする輩にまで、下げる頭は持ち合わせていないのだ。

只でさえ困惑している所に、俺からの突然の貴様呼ばわり。今井さんは完全に怯えている。もう、ペースは完全のこちらの物だ。何よりもまず、ペースを握る。交渉の基本だろう。

聞き込みとしては、酷く間違っている気もするが。

こうして場が硬直したが、先輩は表情を変えず、改めて要件を伝え始める。

「私の助手がすみません。実は今我々は、例の盗撮事件について調べているのです。その件について伺いたい事がありまして。少し、お時間よろしいですか？」

「あ、はい……どうぞ」

こうして今井さんが前後不覚に陥っている間に、俺達はまんまと写真部の部室に上がり込む。

入ってみるとそこは、思ったよりも片付けられていた。

部屋の中には大きめの机とそれを囲むイス、そしてそこから見やすい壁際にホワイトボードが設置されている。普段はここで、会議などを開くのだろう。例えば今、そのホワイトボードには『今年の勧誘目標』が書かれている。

一方、壁側にはいくつもの棚が並べられ、それらはほとんどアルバムで埋まっている。よく見れば、撮影年毎に並べられている様だ。

そして、部屋の隅には一組のPCとプリンタが置かれていた。最近では写真もデジタル化したおかげで、これだけあれば現像が可能なのだ。俺もよく家族に頼まれて、自宅で写真をプリントアウトしている。

加えて、その横には、部が所有するカメラなども置かれている。カメラには詳しく無いが、一般的に見るような小さくて軽いカメラもあれば、一眼レフというのだろうか、やたらおおきなレンズのついたカメラもあった。

そうして俺が部屋中をじろじろと眺めていると、今井さんはそれに気づいたのだろう。

「あ、えっと、こちらにどうぞ」

と席を勧められた。

勧められるまま席に着いた俺は、そっとカバンの中を覗き込む。

そこでは、 그레이が寝ぼけ眼であくびをしていた。さすが、ネコ型ロボット、あれくらいの振り回し方ではなんとも無いらしい。俺と目が合った 그레이は、小声で話しかけてくる。

「マスター、なんでうちはこんな所に？」

対して、俺も口に手を当てて、内緒話を始めた。カバンに向かって。

「いや、一仕事してもらおうと思ってな」

「それは構へんけど、ちゃんと起こしてくれたら良かったのに」

「気持ち良さそうに寝てたから、起こすのも悪いかと思って」

「うちの知る限りやと、その台詞はもっと良い場面で使うはずの物やけど」

よしよし。スリープを解除した 그레이は、ちゃんと機能している様だ。

そうやってカバンをのぞき込んでいると、今井さんが訝しげに俺を見てきた。

「あ、あの……？」

「すみません。ちょっと俺、カバンに向かって喋る癖がありまして」

「もうそれ、言い訳でも何でも無いやん。ただのおかしい人やで」

カバンの中から、またも 그레이にツッコまれる。一方横で、先輩は涼しい顔だ。

一人と一匹、今日も本調子の様で何よりである。

とにかくこれで、こちらの準備は万端となった。ここからは、先輩に任せよう。

「本日は突然押しかけて申し訳ありません。私は探偵愛好会で探偵をやっている家津。そしてこちらは助手の渡無」

先輩は名刺を渡しつつ、俺を紹介する。

「どうも、渡無です。写真は魂が抜かれるので苦手です」

「マスター、それいつの時代やねん……」

カバンの中で、グレイが何か言っている。なんともマメな奴だ。

「あ、どうも。先程も言いましたが、僕が今井自遊です。それで、盗撮事件の話でしたか。あの件では、大変申し訳ない事をしたと思っています……」

「反省されているのであれば、やり直せますとも」

先輩は、白々しくも言い切った。

「そうですね……。それで、今日お二人は何を聞きたいんでしょう？ 盗撮の方法に関しては、流石に僕も聞いていないのですが……」

「いえ、我々とはある筋から頼まれて、独自に裏を取っている所でしてね」

先輩は更に堂々と、嘘を言い切った。この辺りの大胆さはなかなか凄いと思う。

「風紀委員の方と同じ様な事を聞くとありますが、気を悪くせずお答え頂けると助かります」

「はい、分かりました」

そうして、先輩はまず、大筋の流れを聞き出した。その内容は、次の様な物だった。

今井さんが隈吉氏と初めてコンタクトを取ったのは、一週間ほど前の事だった。その内容は、人体という芸術を、皆で鑑賞して欲しいという物であった。そして、そのメールに添えられていたサンプルデータを見て、今井さんは非常に驚いたという。なぜならそれは、盗撮と思しき写真データだったからだ。今井さんも初めは戸惑ったものの、結局誘惑に逆らえず、データを全て貰うことにしてしまった。そして隈吉氏の望み通り、その写真を仲間内で共有しようと思い、販売会を開いたのだった。

聞いている限りでは、あの隈吉氏の性格とこの今井さんの雰囲気合わされば、有り得ない話ではないと思えた。

「なるほど、経緯は分かりました。そうするとまず……、あなたのお仲間、とはいったいどういう集まりなのですか？」

「ああ、いえ。ただの友人ですよ」

「友人にしては、人数が多いようですが」

先輩は、手帳を見ながら言う。きっと、昨日風香様から聞いた、販売会の参加者リストを見ているのだろう。そしてそれによれば、写真の販売会には多数の生徒が参加しているのだった。

「ええ、まあ、その一、友人にはその友人を呼ぶように言いましたので、それで人数が膨れ上がったのではないかと」

「ふむ。舶人君は、この話を知っていたのかね？」

話を振られた俺は、少しだけ、密かに落ち込んだ。未だに友達と呼べる奴が大宙《だいちゅう》（例の自称宇宙人）くらいしかいない俺に、校内の噂話やクチコミの事を聞かれても、知っているはずが無いのだ。しかし、それは顔に出さずに返す。

「い、いえ。その件は記憶にございません」

「まあ、君は友達が少ないからな」

ぐっ……。分かって聞いたんですか、先輩。俺は更に密かに凹みつつ、クールに返す。

「ふっ。俺はわざわざ盗撮写真なんて求めなくても、女子の方から寄って来るんですよ」

これにグレイはそっと、「但し、ゲームに限る」と付け加えた。

先輩は諸々を「まあ、この件は結構です」と言って流した。そして何事かメモを取ると、次の質問へ移る。

「次に気になるのは、我が校の約半数を占める男子生徒の内、何故あなたが選ばれたのか、という点でしょう。それについて、何か心当たりはありますか？」

「そうですね……。彼は時々うちの部にも顔を出していましたから、僕とも面識があります。それに、内容から考えると、僕は適役でしょう」

「と、言いますと？」

先輩が聞き返す。

「彼の目的は、人体、それも裸体の芸術性を広める事でしょう？ その点、まあ自分で言うのも悲しいですが、僕はそういった物と無縁の生活を送っていますので……」

「つまり、彼女いない歴街道をばく進中って事ですか」

先程のやり取りで心がささくれだっている俺は、全く人の事を言えないにも関わらず、ストレートに言ってやった。やーい、やーい！

「まあ、そういう事です……」

今井さんは、目に見えて肩を落とす。……なんだか凄く悪い事をしてしまった気がする。

「ああ、いや、ほら。まだ大丈夫ですって。僕たちまだ高校生ですよ？ 最近は晩婚化が進んでいると聞きますし、気にする事はありませんって」

「そ、そうですね……？」

「いや、それは違うと思いますな」

「え、あ、やっぱりそうですか……」

折角俺が励ましたというのに、先輩の一言によって、またも今井さんは落ち込んでしまった。

「ちょ、ちょっと先輩なんて事言うんですか！ 先輩は可愛くて人気者だから分からないかも知れませんが、僕たちには深刻な悩みなんで——」

「いや、その事ではないよ」

俺があること無いこと言って反論しようとする、それはすぐに遮られる。

「私が言いたいのは、その理屈では隈吉氏があなたを選んだ事が説明できないという事です。いえ、より正確に言うと、その理屈で選んだのであれば、盗撮写真を渡すなどという行為は中途半端にすぎるのです。現代では女性の下着姿の写真など、直ぐに見られるはずでしょう？ 隈吉氏なら、もっと堂々と撮影したヌード写真も持っているはずだ」

「え、ええ、まあ……。そう、かも知れませんが……」

そうして、今井さんはしばし黙り込んでしまう。

確かに、内容が非常に下世話であるが、先輩の言う事はもっともだ。女性諸氏には申し訳ないが、ちょっとネットで検索すれば、そのような画像はごまんと出てくる。むしろ、動画です

らアップされている世の中だ。女性諸氏には本当に申し訳ないが、世の男などそんな物である。男性が理性的で女性が感情的とか、絶対嘘だろう、と常々思う。

話が逸れた。

さて、彼がここで黙り込むというのは、それだけで彼が嘘を言っている可能性を示唆する。なぜならこの場面、今井さんはただ一言『人の考えている事は分からない』と言えば良いだけなのだ。それが咄嗟にできない時点で、今頭の中では別の事を考えている可能性がある。例えば『もっと他に良い言い訳は無いか』とかを。なまじ作り話をすると、嘘を嘘で塗り固めようとしてしまう物なのだ。と言う事を、後で先輩が言っていた。当然、俺はそんな事考えてもいなかった。

だからだろう。先輩は、今井さんに定期的に質問を投げかけ続け、思考を妨害していく。

「部活動以外での面識は有りませんでしたかな？」「隈吉さんとはどの様な話を？」「今井さんはどの様な物を被写体に？」「条件に該当する生徒はあなた以外にもいそうですが？」

そうして出来上がっていった今井さんの答えは、「実は僕女の子の着替えに一番興奮する変態で、それを隈吉さんに熱く語った事が有るんです」という物だった。そうまでしても、今井さんは『隈吉さんから写真を貰った』という説を崩したく無かったらしい。誘導されたとはいえ、かなり酷い答えである。グレイからも「地球の男、怖いわー」という悲鳴があがっている。なんかもう、重ね重ね、女性諸氏にはごめんなさい。

「なるほど、参考になりました。では最後に——」

そして、先輩は最後の質問に移る。

「隈吉さんから来たというメールを見せてもらえますかな？」

「あ、はい、ちょっと待ってください」

言って、今井さんは自分の携帯をいじりだす。多分これが、今日の聞き込みで一番重要な所だろう。これまでは証言だけであったが、これだけは物的証拠であるのだ。それも、隈吉氏を信じれば、捏造の証拠である。そして携帯のメールともなれば、俺の出番だ。先輩がやった様に、俺もうまくやらねばならない。

そうして俺が気合を入れていると、俺たちに携帯が差し出された。

「これです」

チラリと先輩を見るが、その目は『舶人君が取るように』と語っていた。俺はそれに従い、携帯を受け取り、持ち上げ、360度から観察する。

「ほほう。いい機種をお持ちだ。俺も今の携帯は、この機種と迷ったんですよ」

「そこやない……」「そ、そうなんですか」「」

グレイが力なくツッコミ、今井さんは困惑し、先輩は何の反応も見せない。黙るというのとも少し違い、本当にただただ、無反応。おかげで『……』ですらない。先輩のこのスルー力は、なんだか凄い領域に達している気がしてきた。

「さて、それではメールを拝見」

そんな事を思いつつ、俺はメール本文の精査を開始した。

内容は、至って普通だ。人体は宝だとか、芸術は共有されるべきだとか、いかにも隈吉氏が言

いそうな文面が並んでいる。差出人アドレスは、昨日風香様から聞いた物と一致し、隈吉氏の常用アドレスになっている。受信日は今井さんの言うとおりの一週間前だ。

「どうかね？」先輩が聞く。

「筐体デザインは俺の物の方が好きですね」俺が外す。

「それで？」先輩が平然と聞く。

「ですけど、操作性はこっちの方が良いですね。まあ少しの差ですが」俺が平然と外す。

「なるほど。他には？」先輩が毅然と聞——。

「マスター、その辺にしときや」

グレイに怒られた。怒られては仕方ない。真面目に答えよう。

「まあ、今見えてる情報には不信な点はありませんよ」

「『には』とは？」

流石は先輩。俺が持たせた含みを、しっかり捉えている。

「そのままの意味ですよ。今見えていない情報を見てもみないと分かりません」

俺は答えつつ、今井さんを観察していた。

「ど、どういう事でしょう……？」

彼は、明らかに狼狽えていた。これは決まった様だ。

通常、Eメールには本文の他、ヘッダと呼ばれる情報領域がある（サーバ間の受け渡しにはさらに、エンベロープという、現実の封筒に相当する物も作られる）。これはコンピュータ同士でメールをやり取りする時に使われる情報であり、一般には見る事ができない。しかし、パソコンであればちょっとした操作を、携帯であっても面倒な操作や手続きをすれば、見る事ができる。ここは非常に重要な情報を含んでおり、ここさえ見られれば、送信日時や送信者の誤魔化しを見破ることができる場合が多いのだ。

今井さんもそこまでの事は分かっていない様子だが、なんとなくヤバそうだというのは感じている様だ。

「ちょっと触らせてもらいますよ」

俺は言いつつ、今井さんの携帯を操作する。しかし、流石に使ったことの無い携帯。うまく所望の情報が表示できない。というかそもそも実は、携帯によっては元々表示できない。それはそれで考えがあり、俺は悪戦苦闘（のフリ）を続ける。

「えーっと、こっちかな……あー、違うな。じゃあ、ここか……？」

すると、それを見ていた今井さんが突然立ち上がり「僕がやりますよ」と言いつつ、強引に携帯を奪い返していった。釣れた、と言って良い。やはり、今井さんはメールのヘッダを見られると困るのだ。

ぐふふ、かかったな！ などと俺は心の中でほくそ笑む。

一方、今井さんは、「えーっと、あ、手が滑った！！」と言って窓から携帯を投げ捨てた。

……………あれ、おかしいな。幻覚でもみたかな？

「先輩、今、携帯が窓から外に飛んでいきませんでした？」

「ああ、飛んで行った様だね」

マジかよ！ こいつ、やりやがった！！

「ああー、いやー、困りましたね。僕の携帯がバラバラですよ。とりあえず僕はあれ拾いに行きたいんですが、もう質問は良いですよ。そろそろ出て行ってもらえますか？」

しかも、俺たちは半ば強引に追い出された。

「それじゃ、調査頑張ってください！」

そして気づけば、写真部の部室の前に、俺と先輩は取り残されていた。

「……ハッ！ こ、ここはどこでしょう」

「廊下だが？」

「廊下やね」

いや、そんな事は分かってますとも。ただなんかこう、あまりに急展開すぎて、理解が追いつかなかっただけです。

しかしこうなると、今井さん、いや、もう今井で良い。今井が真犯人という事でほぼ間違いないだろう。そうでなければ、あんな奇行に走る必要が無い。

先輩も、技術的な事は分かっていない様だが、今井の行動がおかしいというのは分かったらしい。

「ふむ。やはり彼は、重要参考人としてマークしておくとしよう。では次は、各参加者に話を聞きに行こうか」

そうして先輩が歩き出したので、俺はその後について回った。

この時は心底驚いた

結局、聞き込みを終えて事務所に帰ってきた時には、そろそろ正門も閉じようかという時間だった。探偵愛好会の持つ権限により俺達は居残り自在ではあるのだが、わざわざ手続きをするのも面倒だし、基本的に先輩はこの時間を守る方針で活動していた。

帰ってくるなり先輩は、探偵装備を解除し、今日得られた情報をまとめている。

「あ、そうだ。ねえ、船人くん」

「イエス、ボス」

最近何だか心地良くなってきた先輩のアニメ声に呼ばれ、俺は眺めていたモニタから視線を外した。

「今井さんの携帯の事なんだけど、あれはどういう事なの？」

そういえば。すっかり先輩への説明を忘れていた。俺は手短に、Eメールの仕組みと、そこから言えるだろう事、つまりヘッダ情報からメールの真偽がある程度判別できる事を説明する。

「へえ。そうなんだあ。じゃあ、壊されちゃったのはちょっと失敗なのかな？」

「いや、そうでも無いですね。これは単に結果オーライだったのですが、今調べた所によると、あの機種では元々ヘッダ情報は見れないみたいです。その辺り、携帯ではサポートしない事がありますからね。今井はそれを知らなかった様ですが、焦って破壊するくらいですから、怪しさ満載ですよ」

俺は再度モニタを見ながら言う。実は先程から俺は、壊された今井の携帯でメールヘッダをどうやって見るのかを調べていたのだ。

「えっと、つまり？」

先輩が首を軽く傾げながら言う。その仕草の可愛さに、俺はその場で萌え転がろうと思ったが、思ったときには既にやっていた。

「マスター！　しっかりしてや！」

「ハッ！　俺は何を……」

制服についたホコリを払いながら、俺は姿勢を正す。

「つまり、先輩は可愛いという事です。ついでに、今井が提示したメールは多分捏造です」

「そっか、ありがとう」

果たしてそのありがとうは、どういう意味だろう。まあこれまでの経験から行くと、前半は完全にスルーしている気がするが。

そうして先輩はまた、手書きで状況をまとめ始める。

「それにしても先輩、結局このメンバーは、どういう集まりなんでしょうね」

あの後俺達は、可能な限り参加者達に話を聞いて回ったのだが、結局分かったのは参加者同士の繋がりが見えないという事であった。彼らは皆、学年もクラスも部活も異なっている。一部を取り出せば多少の共通項はあるものの、全体としては統一感に欠いていた。

『友人が友人を呼び』というのが今井説明だが、果たしてそれで、何十人と集まるだろうか。また逆に、何十人も口コミで集まったとするならば、その過程で風紀委員の耳にもその情報は入る可能性が高い。それを考えるとやはり、今井の話も腑に落ちないのだ。そして既に、俺達は今

井が嘘の証言をしていると考えているのだ。これについても、信じるいわれは無い。

「うーん。調べてみないと分からないよ」

まあ、それはその通りだ。調べないと何も分からない。

現状ではそれくらいか、と思った矢先、先輩はさらりと言った。

「だけど、もしかしたら何かの秘密組織かも」

そしてそれをきっかけにしてか、状況は目まぐるしく変わった。

「え？ ……あ、ああ。あの、秘密組織ですか」俺がいつも通り認めた。

ガラッ。資料棚の一つが、ひとりでに開いた。

「は？」俺が目を丸くした。

ズズッ、ドサ。一つのファイルがひとりでにせり出し、落下した。

「？」音に気づいた先輩が、立ち上がってファイルに向かった。

「あ、ちょ、ちょっと先輩。ヤバイですって、今、だって、それ、えっと、と、とにかく一度退避、退避ー！」

俺は、地震でも起きたのかという勢いで机の下に隠れた。そこで、グレイと目が合う。

「な、なあ、グレイ。今の見たか！？」

「今ので？」

「棚が勝手にガラッで、ファイルが勝手にドサっだよ！」

「マスター……物理法則って知ってるか？」

「まーた、そうやってすぐに人の言う事にケチを付ける。だからお前は俺なんかに捕まるんだぞ？ いいか？ 人の言う事はな、素直に信じる物なんだよ。だいたい、この中ではお前が一番超常側だろうが。そのお前が信じず、誰が信じるっていうだよ」

「うちの仕事は記録することやから、自分で見たこと以外は信じへん事にしとるんよ」

これだから、宇宙製の猫型ロボットは困る。頭が硬いんだから。まあ、しかし確かに、俺の見間違い聞き違いという事もあり得る。

こうしてグレイとのやりとりで落ち着きを取り戻した頃、先輩から声がかかった。

「舶人くん。もう大丈夫だから、出てきたら？」

「ほ、ほんとですか？」

俺は物陰から様子を伺うように、机の上に目だけを出した。

そこでは既に、ファイルが元の位置に戻され、書棚も閉められていた。そして、先輩は何食わぬ顔で、自分の席に座っていた。

確かに安全な様なので、俺も席に戻る。そもそも、初めから危険は無かったが。

「えっと、先輩、あの」

「うん。聞こえてたから知ってるよ。だけど大丈夫。よくある事だから」

「よくあるんか？ 今度はうちも見たいわ」

グレイが楽しそうな声を上げる。

「へ、あ、はあ。よくあるんですか」

俺が情け無い声を上げる。

「うん。だから気にしないで大丈夫だよ」

先輩は笑顔で言い切る。

.....そっか。大丈夫なのか。先輩が言うなら信じよう。

こうして、今日は閉門の時間となった。

明けて翌日水曜日。俺が事務所に顔を出すと、そこではグレイが我が物顔でソファを占領していた。……こいつは観測が任務だったはずだが、これで良いのだろうか。

そんなグレイを横目に、俺はパーティションの奥を覗き込むが、

「おはようございまー……。いない」

そこに目当ての姿は無かった。俺は即座に反転し、グレイの首を摘み上げる。

「もしもし、グレイさんですか？」

「あー。うん。聞こえとる……。聞こえとるよ……。Zzz」

グレイは眠そうな目で、というかほとんど瞑った状態で、反応を返してくる。

「じゃあ聞くけど、我が友大宙のスリーサイズは？」

「マスター、それほんとに聞きたいん？」

「……………いや、あまり」

教えてもらっても、全然嬉しくない。

「まあ良いや。先輩はまだ来てないのか？」

「ボスならついさっき出ていったで」

「ええ！ 俺という助手がありながら先輩一人で！？ 傷付くわー（棒読み）」

「『かっこ』とか『かっこ閉じ』は言わんでもええやろ」

グレイは器用に目をこすりながら、ツッコミをいれてくる。俺としては、ロボットのお前に、本当にその動作が必要なのかを問いたい。が、それは当然聞かない。

「先輩がどこに行ったかは聞いているか？」

「さあ。うちは留守番を頼む、としか言われてへんから」

となると、今から追いかける事もできないか。

俺はグレイを自分のデスクの上にまで運ぶと、グレイの中の仮想PCを立ち上げる。そして、先輩もいないしまたマインスイーパーで遊ぼうかと思った、その矢先。俺の携帯が震えた。

取り出して見れば、どうやら俺が探偵愛好会用を取得したフリーメールサービスに、風香様からメールが届いている様だ。こうやってPC向けのメールも素早く受信チェック出来る辺りが、スマートフォンの優秀な所である。

俺は仮想PC上でメーラを立ち上げて、届いたメールを確認する。それは、『一筆啓上申し上げます』から始まり『かしこ』で終わるという時代錯誤な文面だったが、要約すると『先日言った盗撮写真のデータを送ります。調査に役立ててください』という物だった。メールには一つの圧縮ファイルが添付されており、その中に写真データが入っている様だ。あれだけ和を貫いている人だが、コンピュータは普通に使えるらしい。

俺は速やかに添付ファイルを保存し、解凍する。そして出てきた大量の画像から適当な画像を開き――。

「ブホァ！ ……っ痛！」

思っきり吹き出すと同時に、椅子ごと後ろに倒れ、軽く頭を打った。

「マスター……何やってるん？」

うーむ。流石にこれは、グレイにはツッコミ難易度が高かったか？　と言うか、分かりにくかったか。

「っ痛たたた……。いやな、地球の高校生は女性のセクシーショットを目撃すると、盛大に鼻血を吹き出して倒れる物なんだよ」

それが、漫画的お約束である。

「別に鼻血なんか出とらへんけど」

「いいや。俺には見えるね。俺の心の鼻血がな！」

「地球人の心は複雑なんやねえ……」

こうして俺はまた一つ、地球人への誤解を与える事に成功した。

それに満足した俺は椅子を立て直し、もう一度画像に向き直る。

「ブホァ！　……って痛！」

そしてまた、吹き出すと同時に椅子ごと後ろに倒れ、軽く頭を打った。

天井だった。

「マスター、大丈夫なん？」

「あ、ああ。何とかな……。だが、こいつは強敵だぜ……。俺は先輩の為に、この写真達をチェックしないとイケないのに、それが出来ない……。このままじゃ、俺は助手失格になっちまう！　こんなチンチクリンの女子高生の下着姿に、負けて、たまるかあー！　……ブホァ！！」

なんだかもう、やってる自分が一番痛い。こんな茶番はさっさと止めて画像のチェックに入りたい。しかし、ネタばらしをするには早過ぎる。写真を見ないと仕事にならないのに、それが、出来ない……。！！　果たして、俺はここからどう動けば良い？　やはり、信念を曲げるしかないのか！？

そうして天井とにらめっこをしながら打開策を考えていると、グレイが言った。

「マスター……。よっしゃ、うちにまかしとき！」

「ん？」

「よし、完成や。写真見てみ」

俺が反応を返すその一秒にも満たない時間の間に、グレイは何かをしたらしい。言われた通りに起き上がって画面を見ると、そこでは、先程の写真がとある加工を施されていた。

「こ……これは……！？」

「これでマスターも写真が見られるやろ？」

それは、写真の一部をベタ塗りで隠すという物であり、少し前にネット上で「逆に裸に見える！　不思議！」と流行った物に近かった。

……試しているのか？　いや、グレイは『良い仕事をしたわ』という顔をしているので、きっと純粋に俺の熱意に応えてくれただけだろう。いくらロボットとは言え、部下を疑うのは良くない。

「ああ、これなら大丈夫だ。助かった」

俺はグレイに礼を述べて、写真のチェックを開始する。

写っているのは様々なクラスの女生徒達で、これが身体測定の日だというのは間違いない様だ

。どの生徒が被害に遭っているのかは、先日風香様から頂いたリストと愛好会が持つ生徒名簿を突き合わせれば、裏も取れるだろう。

面白いのは、写真の撮影アングルがいくつも有る事だ。比較的部屋の高い位置から俯瞰する物や、ローアングルから見上げる物。面白い物では、ロッカーの中からその隙間を通して外を覗く様なアングルまである。

これらの事実から、カメラが複数台設置されていた事。また、そのうち何台かは、偽装を施した上で、堂々と通路上に置かれていた事が推測できる。

そしてその推測が正しいとすれば、全てのカメラを一人で設置、回収するのは、非常に困難であった事もうかがえる。それ程までに、多種多様なアングルが存在していたのだ。

この辺りは、先輩とも協議しないとイケない。

そう思いつつ一定の間隔で写真を切り替えていると、ある時それが、ひとりでに凄い速度で切り替わり始めた。

.....え？ ま、まさかこれはまた、ポルターガイスト的な現象ですか！？

「お、おお、落ち着け俺。だだ、大丈夫、害は無い。害は。とにかく冷静になるんだ。大丈夫」

俺は自分に言い聞かせる様に「落ち着け」と「大丈夫」を繰り返す。実際の所、2回目という事もあってあまり焦ってはいないのだが、様式美という奴だ。

とは言え、まずはこれが本当にポルターガイスト現象なのか確認する必要がある。

「おい、グレイ。お前何もしてないよな？」

「マスターこそ。なんや急にキーボードを連打したりして、どないしたん？」

なるほど。グレイからはそう見えているのか。

俺は試しにキーボード（無線式）の電源を落としてみるが、それでも写真の高速送りは止まらない。

「やっぱりまだ連打されてるか？」

「そやね。ずっと指令は来とるよ」

となるともう残る可能性は、本当にポルターガイストか、キーボードの無線通信を模倣されているかだ。

状況の説明としては、後者の無線通信模倣説の方がスマートだが、少なくとも今の技術では困難を極めるはずだ。それこそグレイの様な超技術が必要となるだろう。

一方で、前者ポルターガイスト説では、そういった心霊の類と電波との親和性が問題になる。前回のグレイ捕獲作戦の時には結局、グレイが機械側だった事で決着した。しかし実際に、現代の心霊が電子機器に干渉できないとも限らない。

どちらにせよ、並々ならぬ存在がこれを行っている事に代わりは無かった。

いや、実はもう一つだけ、しかも最も現実的な説明ができる説がある。しかしそれは、してはいけない解釈だ。俺はそれを、心の奥深くに沈める。

そうやって、俺が状況の分析を進めていると、その現象は唐突に終わりを迎えた。

「止まったみたいやね」

グレイが言うとおりの、ある所で写真送りがストップしたのだ。

「また中途半端な所で止まったな」

止まった所は写真全体から見て半分程度の所であり、まだまだ大量の写真がある。試しにそこから写真を進めると、問題なく閲覧できた。

では、戻すとどうなるのか。実際にやってみれば分かる訳で、俺は高速スキップされた範囲の写真を適当に選択してみた。すると、また高速スキップが始まり、結果先程と同じ写真で停止した。これは何度やっても同じであり、必ず同じ写真で停止した。

どうやら、高速スキップの終端は決まっているらしい。

ならばという事で始端についても調べてみたが、終端と同様に、必ずある写真に差し掛かった所で高速スキップが開始される事が確認できた。

つまり、この範囲の写真に、何か特別な意味があるという事だろう。

「ふっふっふっ……」

「どうしたん、マスター。急に笑い出して」

「ゲームで鍛えたこの連打力。よもや役に立つ日が来るとはなあ！」

「もしも〜し、マスタ〜？」

俺はグレイの呼び掛けをスルーして、キーボードに指を構えた。そして。

「うおおおおおおおおおおお！！」

キーボードの矢印キーを高速連打した。

「何だとおおー！」

「まだまだー！」

「負けるかあー！！」

「それはこっちの台詞だあー！！」

と、ひとしきり一人芝居を続けた俺は、唐突に飽きて連打を止めた。

「ふう。いい汗をかいたぜ……」

俺が額の汗を拭っていると、横から声をかけられた。

「相変わらず、無駄な事に青春を捧げている様だね」

それは、いつの間にか戻ってきていた先輩だった。

「あ、先輩じゃないですか」

「おかえり、ボス」

「ああ、ただいま」

俺達に挨拶をした先輩は、そのまま、俺の横、画面がのぞける位置にやって来た。

「何してたのかね？」

「いえ、風香様から盗撮写真のデータが送られてきたのでその検証をしていたんですが、ご覧の有様でして」

俺は先輩に、先程から起きている写真スキップの怪と、それに対する見解を説明する。

「ふむ。なるほど。私にも見せてもらえるかな？」

「ええ。それじゃあもう一回頑張りましょうか」

俺は再度マウスを操作し、問題の写真を選択する。それはやはり、ひとりでに高速送りされてしまう為、俺は負けじとキーボードを高速連打する。

「うおおおおお！」

「ああ、すまない」

「でりややああ！」

「頑張ってくれている所悪いんが」

「はああああ！！」

「写真送りはそのままが良い」

「ぬおおお……って、え？」

「むしろ、そのままが見たいのでね」

「なん……ですって……」

俺はその言葉に、愕然とした反応を返し、虚空を見つめて虚無感を演出した。しかし、そもそも先輩は画面を睨み付けており、俺のリアクションに気づいてもいなかった。

そうこうする内、写真送りは、やはり先程と同じ位置で止まった。

「もう一回」

「はい」

俺は先輩の求めに応じて、また写真を選択するが、すぐに送られる。

「もう一回」

「はい」

「もう一回」

「はい」

「……」

「はい」

っと、一回余計にやってしまったが、これをやっている何者かは律儀に何度でも付き合ってくれた。いい加減、疲れないのだろうか。

一方で、唸り声を上げた先輩は、別の注文をしてくる。

「他の写真も見せて貰えるか？」

「ああ、はい」

俺は先輩に写真を見せながら、アングルが複数ある事、それらの一部は堂々と置かれているらしい事も説明した。

そうして、ある程度の写真を見た先輩は、何かを確信した様に言った。

「出かけるぞ、船人君」

「あ、はい。すぐに準備します。でも、どちらに？」

俺が尋ねると、先輩は一言、こう答えた。

「自称、狂気の科学者《マッドサイエンティスト》の所にね」

……誰？

「家津さん……ですよね？」

「ああ。そうだ」

「まずいぶんと雰囲気が変わりましたね。まあ、色々ありましたし、仕方ない事かも知れませんが。とりあえず、適当にお掛け下さい」

その部屋で俺達を迎えた自称狂気の科学者《マッドサイエンティスト》、西京助《にしきょうすけ》博士は、その丁寧な口調とは裏腹に、作業を中断する事も無く、こちらを振り返りもせずに行った。

俺達がやってきたのは、事務所から程近く。直線距離なら、徒歩1分程度の距離である。つまりそこは、俺達の様な同好会メンバーが集められた新講義棟の一角であった。

西秘密研究所《ウェストシークレットラボラトリー》と名付けられたその部屋は、俺の目算で、家津探偵事務所の倍程度の広さを持っていた。そして、意外にも部屋はそれなりに綺麗に片付いており（俺の中では科学者の部屋は汚いというのが常識になっているのだ）、ミーティングスペース、作業場、資材置場、完成品置き場という具合に、スペースがきっちりと分けられていた。

ちなみに、この部屋は文字通り秘密《シークレット》な部屋で、ただ入るだけでかなり複雑な手順を必要とした。尚、説明が長くなるので、次の段落は読み飛ばした方が良い。

まず初めに、新講義等の一角にある、秘密のスイッチを探さなくてはならない。しかもこのスイッチ、ある範囲内に何個か散らばっており、正解のスイッチは日替わりというひどい仕様だ。もしも間違ったスイッチを押すと、落とし穴にボッシュートされる。先輩がロープをおろしてくれなかったら、餓死する所だった。めでたく正解のスイッチを押す事ができると、なんと壁から扉が現れる。この扉は一見なんの変哲も無い扉で、型は事務所の物と変わらない。だが、その油断が命取りである。普通に開けようとしてその扉の取手に触れると、超高圧の電気ショックを受けるのだ。一応死なない程度に調整してあるらしいが、痛いとかそういうレベルじゃなかった。この扉に対する正しい対処方は、上に持ち上げる、だ。引き戸なのでつい横に動かそうとする、人間の心理を巧みについた罠である。さて、そうして扉は開かれた訳だが、そこには赤外線レーザーによる感知式トラップが仕掛けられている。それ自体は、気合で避けられるのだが、それを実行していると足元へ注意が向けられず……またも床にボッシュートされる。先輩には何度も申し訳なかった。それではどうするのかというと、簡単な話で、この扉に入ってはいけない。実は扉を持ち上げた事が一つのスイッチとなっており、それから暫くの間だけ、一番初めに操作したスイッチの正解が替わるのだ。替わった後の正解もまた日替わりであり、押し間違えると、当然またボッシュートされる。ついでに、初めからやり直しとなる。いったい、何度落とせば気が済むのか。そうして二段階目の正解スイッチを押すと、ようやく部屋の主へと連絡が取れ、どこからともなく玄関のチャイムを鳴らした音が聞こえてくる。なぜかどこかのコンビニで聞いた音と同じだったが、単純に製品を使い回したのだろう。そして待つこと数秒、やはりどこからともなく『ン・ゼパラ・ロウ』という意味の無い言葉が聞こえてくるので、それに対して『ミラ・ジルスト・ンダシーン』というやはり意味の無い言葉を返すと、天井からカードキーが降ってくる

。それを持って一つ上の階の同じ場所に行くと、部屋と部屋の中の何もなさそうな所に扉が出現している。それを先程のカードキーで開ける事で、下への階段が出現する。降りる途中には何度か分岐があり、間違えることなくそれを降りてくる事で、ようやく、ようやく！ この部屋に到達できるのだ！！

グレイは『一体誰と戦ってるんや……』と言っていたが、俺もまさか『ちなみに』で初めてこんなに長く説明する事になるとは思わなかった。

そんな複雑な工程を経て到達した西秘密研究所《ウェストシークレットラボラトリー》だが、特に労いがある訳でもなく、コーヒーはセルフサービスだった。俺は置かれていたコーヒーマーカから、二人分のコーヒーを頂戴し、ミーティングスペースの椅子に腰掛ける。

「ところで」

俺達の来訪を背中であげたこの部屋の主が、ようやく、首だけ振返る。その顔には、眼鏡が光っていた。

「それは何なのですか？」

そういった視線の先には、俺が持ってきた、グレイ入りのカバンがあった。よって俺は、ありのままを答える。

「カバンだ」

「いえ、その中に入っている物体の方ですよ。見た限り猫型の様ですが、どうやら会話機能があるらしい。僕はそんな物を造った記憶は無いし、既存の製品とも思えない。それをどこで手に入れたのです？」

全てばれている……だと！？ 何故だ？ 会話機能と言っても、事務所の外ではあまり喋らない様に言って……無いな。そのうち普通にバレそう。しかし少なくとも、この部屋の中では喋っていないはずだ。どうして分かった……？

という事を口ではなく顔に出していると、狂気の科学者《マッドサイエンティスト》さんはわざわざ説明してくれた。

「ふっふっふ。この研究所《ラボ》は言わば、僕の支配領域《テリトリー》なのです。この中に入ったが最後、僕には全ての情報が筒抜けです。音、光、熱。あらゆる情報が手に取るように分かる。そして僕の言う研究所《ラボ》は、この部屋だけではない。この部屋への入口《エントランス》から既に、監視の目を光らせているのです。この空間において僕はまさに、神となる！」

何だか西博士のテンションが妙に上がってきたので、俺もそれに合わせていく。

「くっ……やるな、西博士。それじゃあついでに、俺が何者なのかもお見通して訳か！」

「あいにく僕は、興味の無いものは……いえ、ちょっと待ってください。あなた、なぜ僕の名を知っているのです？ それはこの部屋の存在と同じ、最高《S》ランクの機密事項のはず！ それを知っているとは……まさか貴様、“機関”の人間か！？」

“機関”とは、何の事だろう。いかにも厨二な単語だが、まあきっとそういう物があるのだろう。

「まあまあ、落ち着いてください。蛇の道は蛇と言ってね。いくら機密だとしても、知っている人はいるんですよ。例えば……そう、そこでコーヒを飲んでいる家津さんとかね」

「ああ、私が教えた」

「何と……それではあなたは……？」

「ええ、そうですよ。俺はあなたを追う“機関”と敵対する……そう、“結社”の一員です」

「そうでしたか。そうなる、あなたが噂の新人、渡無さんですね」

いや、一体どこで噂になっているんだ？ そんな噂聞いた覚えが無いが……。

「ええ、そうです。俺が新入りの渡無船人ですよ」

「“機関”はこの世界に平和をもたらそうとする唾棄すべき諸悪の根源です。しかしその組織は強大であり、未だその全容は把握しきれていない。対して、我々“結社”はまだまだ小さく、弱い。新人が入ってくれたのは喜ばしい事です」

“結社”なんて設定は今俺が勝手に作っただけなのに、乗ってきちゃったよこの人……。

「これから長い付き合いになるかもしれません。よろしくお願いします」

そうして、西博士は振り返り、俺に向かって手を差し出す。

こちらを向いた西博士の外見だが、白衣を着た小学生、と言え間違いなかった。もちろん下は半ズボン装備である。

この西博士、見た目と言えば某先輩とキャラが被っていたが、決定的に違う点があった。それは、先輩が合法ロリ一歩手前なのに対し、西博士は全力で違法シヨタである事だった。つまり、聞いて驚く無かれ、西博士は実年齢が9歳なのである。先輩と違って、ガチ小学生なのだ。

ここに来るまでに先輩に聞いたが、実はこの西博士、天才的頭脳の持ち主らしい。なんでも、3歳で数学のなんとかいう定理を証明したとか、0歳で五ヶ国語をマスターしたとか、そもそも生まれてくる時に素数を数えていたとか、数限りない胡散臭い伝説を残している。事の真偽はどうあれ、超人的頭脳を持っているのは確かな様で、博士は超常学園内で飛び級を繰り返していた。その結果、現在は俺と同じ1年S組所属扱いになっているのだ。そればかりか、本年度はまだ始まったばかりだというのに、来年度には大学への飛び級が決まっているとか。

そんな生まれながらの天才の為、博士は全授業への出席を免除され、ホームルームは自己欠席を貫いている。だから、今日ここに至るまで、クラスメイトである俺たちが会った事は無かったのだ。世の中には、凄い人がいるものである。そりゃあ、実年齢は小学生なのに、厨二病も発症するさ。

ちなみにこの博士は〈先端技術研究会〉という同好会を主催しており、〈探偵愛好会〉からは要注意人物として扱われると共に、技術面のアドバイザーになってもらっていたらしい。特に、家津の家系は電子機器に滅法弱い（それとも強すぎるというべきか）為、必要不可欠な存在だったらしい。

「どうしました？」

俺が差し出された手を眺め、先輩の話を思い出していると、西博士は怪訝な顔をした。

いかんいかん。同級生を待たせてはいけない。

「こちらこそよろしく」

そう言って俺は、差し出されたプラスチック製のマジックハンドを握り返した。

「こんな握手もあるんやね」

と、既にカバンから出たグレイは感心していたが、こんな握手はありません。俺は海よりも広

い心と砂山より低いプライドで許しますが、絶対何人か怒らせたましたよね、これ。

「挨拶も済んだ所で、早速本題に入ろう」

なかなか斬新な挨拶文化ですね。

そんなつぶやきは俺の脳内から出る事は無く、俺は適当な所に腰を落ち着けた。

「博士、今校内で盗撮事件が話題になっている事は、知っているかな？」

「ええ、以前資材の調達に出た時に、簡単にですが聞いています」

博士はまたこちらに背を向け、何かの作業をしながら返してくる。

「なるほど。それなら話は早い。我々は今、その真犯人探しをしていてね。それに関連して、博士にも聞きたい事ができたのだ」

「僕に分かることで良ければ」

「それでは……船人君」

「あ、はい！」

急に呼びかけられた俺は、慌てて背筋を伸ばす。

「博士に、例の写真を見せてあげてくれないか」

「ああ、はい。構いません、けど……良いんですか？」

それは色々と、問題があるのでは無いだろうか？ 信用的な意味と、グレイ的な意味で。しかしどうやら、その点は気にしなくて良いらしい。と言うのも、先輩曰く。

「勿論だとも。我々“結社”に所属する同好会の間には、同盟関係がある。むしろ我々は、手段は違えど、同じ志を持つ一つの部に所属していると考えていい。我々が部活内で情報を共有する事は、既に暗黙の了解となっているんだよ。……君には、まだ言っていなかったかな？」

なのだそうだ。

なるほどつまりは、俺がさっき適当にでっちあげた“結社”という組織が、本当にあるという事か。……俺は何？ エスパーか何かにでもなった？

まあそれはさておき、倫理的・心情的に許されるとしても、まだ一つ問題があった。

「見せると言っても、どこかモニタをお借りしないといけないんですが……？」

そう。見せようにも物理的に見せられないのだ。この部屋には、それこそ壁一面モニターみたいな場所も有るにはあるが、自由に使えるようなモニターは無い。元々、博士が自分用にカスタマイズしたラボなのだから、客にモニタを貸す事など想定されるはずがない。

どうした物かと思っていると、博士が言った。

「それなら、そこのプロジェクタをどうぞ」

「これはご親切にどうも」

俺は礼を言ってみる。博士は相変わらず背を向けている為、『そこ』と言われても、全然指示になっていなかった。しかし、プロジェクタなら先ほどから俺の視界の中央、今俺達が座っている会議スペースの机の上に乗っていた。多分、これの事だろう。

「という訳だ。グレイ、頼む」

「よし、まかしとき」

俺が促すと、グレイは机の上に飛び乗り、自慢の尻尾の内一本をプロジェクタに接続した。些細な事なので説明してこなかったが、実はグレイの持つ二本の尻尾は、物理レベルで汎用のI/Oデ

バイスらしいのだ。うん、些細なことだ。

そしてそんな様子を見ていないはずの博士が、感嘆の声をあげた。

「ほう、物理層《レイヤー》での再構築《リコンフィギュア》ですか。まさかマイクロマシン...
...いや、ナノマシン技術を.....？ 本当にその猫は面白いですね。今度分解《バラ》させてもら
っても良いですか？」

「あかんあかん。うちの存在は惑星級《SSSレベル》の機密事項やからな。それを分解なんて、
あんた命がいくつ有っても足らんで」

「何ですって.....！？ まさかあなたは、“管理者”直属の.....！？」

ああ、また謎の組織が出てきたよ.....。いや、今度は個人なのかな？ 管理者というのと、神
か何かですか？ 勿論、俺は乗っかりますけどね。

「その通りだ博士。お前も気をつけた方が良い。“管理者”は我々と敵対こそしていないが、その力
には“機関”ですら一目置いている、計り知れない存在だ。その命、無駄にはしたくないだろう？」

「そうですね.....。気をつけましょう」

「我ら“結社”に幸あらんことを。ン・ゼパラ・ロウ」

「ミラ・ジルスト・ンダシーン」

うん、なんだか少し、こんな厨二会話が楽しくなって——。

「舶人君、早くしてくれるか」

「は、はい！ すぐに」

先輩に怒られてしまった。

俺は急いでプロジェクタの電源を入れ、セットアップを行う。

「探偵愛好会、家津、オーン！」

と謎の掛け声まであげてみるが、特に意味は無い。大体、画像の表示などはグレイがやってく
れる訳で、俺がやることはせいぜいプロジェクタの位置調整くらいだ。なんかもう、完全に雑用
だな俺。

とかなんとか思っている間に、準備は完了。スクリーンには、大きなサイズで盗撮写真が投影
された。まあどれもこれも女子高生の脱ぎかけ着かけの写真な訳だが、俺も含めた全員がそれを
神妙な顔で見ているという、なんともシュールな光景が展開される。猥褻系事件の裁判も、き
つとこんな感じなんだろう。なんだが、言い様の無い悲しみに包まれた。

そんな雰囲気も疑問に思わないのか、先輩は事務的に事を進めていく。

「これが、問題の写真だ」

「なるほど。確かにこれは盗撮のようです」

博士は未だ背を向けているが、ちゃんと写真は見えている様だ。ここまでくると、何かしらの
手段でこちらを見ているのではないかと考えられた。

「見て分かるとおおり、これは女子更衣室内の写真だ。撮影されたのは先日の身体測定の日と考え
られる。写真は何枚かごとにアングルが極端に変わり、多数のカメラによって撮影された、様
に見える」

先輩は最後を、強調して言った。そしてそれを自然に受け取れば、先輩は『多数のカメラによ

って撮影された訳ではない』と言ったのだ。

「え、どういう事ですか？」

思わず、俺が聞いてしまった。

「それはこれから説明する。実はね博士、今回の盗撮写真は、一部が見られない様になっているんだよ。グレイ君、スライドを例の写真まで進めてくれるか」

「了解や」

先輩の指示でグレイは、写真を例の高速スキップゾーンに突入させる。するとここでもやはり、写真は高速でめくられ、同じところで止まった。

「ご覧の通り、盗撮写真の一部が、高速スキップされてしまう。我々はこれを、何か外部からの干渉だと考えているのだが——」

「そうなんですか？ 僕はてっきり、その猫が——えっと、グレイでしたか？」

「そや。うちの名前はグレイやで」

「分かりました。では、そのグレイが、高速に送っているだけかと思いましたが」

「ああん！？」

俺は、博士の言葉にキレた、風な体を装った。

「今の言葉は聞き捨てならねえな。グレイがやっただと？ お前は、同じ“結社”の仲間を、俺の部下を疑うのか？ あ！？」

「マスター……。そんなにうちの事を」

グレイが、少し潤んだ瞳で俺を見た。

「い、いや、決してそういう訳では……」

そして流石の博士も、突然俺がキレるとは想定していなかった様で、こちらを振り返って狼狽した。

「だったら謝罪を要求する。今すぐグレイに謝ってくれ」

「わ、分かったよ。グレイ……ちゃん？」

「グレイは一応、メスだという事になっている」

「グレイちゃん、疑って悪かった。この通りだ。許してほしい」

そう言って、博士は頭を下げた。大体、角度にして五度未満だった。本当にこの人は謝る気があるのかと思った。

「いや、うちは別に構へんけど」

「ああ、実は俺もそんなに気にしてない」

「マスター……」

グレイが、じととした瞳で俺を見た。他方、博士は先輩に語りかける。

「家津さん、渡無君は、ずいぶんと情緒不安定な方ですね」

「苦労しているよ」

いやいや、何を本人の目の前でしみじみと語っているんですか、あなた達は。

そんなこんなで、先輩は咳払いを一つ。話を本筋に戻していく。

「ごほん。話がそれたが、私が今日ここに来たのは、この現象を解明する為ではない」

「え？」

「と言いますと？」

俺と博士が同時に声を上げた。

「グレイ君、もう一度例の現象を」

グレイは先輩の指示で、高速スキップされる写真を映し出す。それを俺達は、訝しげな表情で見守った。

そして、黙って見る事数度、初めにそれに気づいたのは博士だった。

「これは……。そうですか、それで僕のところに」

「え、どういう事ですか？」

「舶人君、背景に注目してみたまえ」

「はあ」

言われるまま背景に注目して見る事数回、俺もそれに気づいた。

「これは、もしかして……カメラの方が動いてます？」

「ああ」

「どうやらその様ですね」

そうなのだ。一枚一枚は微妙な変化の為に気づかなかったのだが、この高速スキップを通して見ると、実はこれらの写真の角度は徐々に動いている事が見えてくる。

「そしてもう一つ、この盗撮写真全体に渡って言える事だが、一つの被写体は必ず一つの角度からのみ撮られている」

「なん……だと？」

俺は驚きLv1の反応を返しつつ状況を見守る。

「グレイ君、他の写真も見せてもらえるか」

「了解や」

対して、グレイは多数ある写真を適度な速度で進めていく。そして確かに、同時刻に別角度から撮った様な写真は、一枚も見つからなかった。

「先輩、これは……？」

「ああ、つまりこれら写真、多数の角度がありながら、複数のカメラで撮影された訳では無いと見える。逆に言えばこれらは全て、一台のカメラで撮影されたと考えられる。そしてこれら二つの事象を説明できる方法が一つだけある。それが何か、分かるかね？」

いや、聞かれても俺には分かりません

「それは、カメラに自走機能を持たせる事、なのだよ！」

「な、なんだってー!？」

俺は一人、もはや定番と化した驚き表現を行うが、部屋の空気は寒々しい物であった。

「おい、グレイ、お前も驚け」

俺は、グレイに囁く。

「そないな事言われても、うち自身、動くカメラみたいな物やし」

「あー……」

言われて見ればその通りだ。動くカメラというのも、案外珍しくないのかも知れません。

「それだけでは無い……！」

そんな俺たちをよそに、先輩の話は続いた。

「今回の撮影アングルを見れば、いくつかは、明らかに遮蔽物の無い場所から撮影されている。それも部屋の隅などであれば、カバンなどに偽装したと考えられるだろう。しかしこの場合は、通路の中央など、カバンを置いておくには極めて不自然なアングルが見受けられる」

「そうですね。俺がさっき見た限りでも、そういうアングルが結構ありました」

「それでは、こういったアングルからの写真はどうやって撮ったのか？ これは簡単な話だ。カバンなどより、もっと高度な偽装を施せば良い。例えばそう……光学迷彩の様なね」

先輩はそこで、顔を博士に向け、「そしてそれを作ったのは、あなたでは無いのですか？ 西博士」不敵に言い放った。

ああ、そうか、なるほど。それであんな面倒な手順を踏んでまで、ここに来たんですね。いやいや、まさか、カメラに自走機能を持たせた上、光学迷彩まで実用化してしまうなんて、本当に博士は天才なんですねえ。はっはっは一。

「はい、そうですよ。実物なら、そこにあります」

対する博士は、事も無げに言った。

……って、えええ！？ 本当に？ だって、光学迷彩だよ？ 光学迷彩！ 敵基地に進入したり、警備兵と戯れたり、女の子に悪戯したり、それはもう様々な使い道があるあれだよ？ まだまだどこかの大学では研究段階のはずのそれを、この天才小学生は既に実現しているなんて……。

などと言った感じで、俺の心の中は酷い乱れようなのだが、努めてそれはおもてに出さない。「くっくっくっ。流石だな博士。既に光学迷彩の実用化に成功しているとは……。これでまた一步、我々の勝利が近づいたな」

「全ては“世界”の選択ですよ。ン・ゼパラ・ロウ」

「ああ、その通りだ。ミラ・ジルスト・ンダシーン」

うん、なんだかやっぱり、この厨二会話は楽しいぞ！

「……」 「マスター、大丈夫なん？」

しかし残念ながら、この部屋にいる女性陣には、それが伝わらないらしい。軽く人生を損しているのではないかと結構マジで。

まあ、それはともかく、先輩は本題へ戻る。

「『そこ』、とはどこかな？」

その間に答えたのは、グレイだった。

「ここや。光学センサでは感知できてへんけど、超音波センサでははっきり見えとるわ。ここに、何かある」

グレイはプロジェクタから離れ、机の隅で空中をコツコツと（本当に空間からコツコツと音をだして）、叩きながら言った。

「流石は“管理者”直属。その程度の偽装《カモフラージュ》では騙せませんか」

博士が言うやいなや、なんという事でしょう。そこに突如として、全長30cm程の蜘蛛のような形をした機械が現れたではありませんか。

「最近開発した、深遠に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》です。虚数空間の深遠へとその身をおく事で、実数空間からの干渉を防ぐ機械、となれば良かったのですが、さすがにそれはまだです。それに、家津さんは光学迷彩と言いましたが、そこまで高度な物でもありません。実際には、全身を無数の有機LEDディスプレイで包み、それを使って周囲の環境に溶け込んでいるだけです。カメレオンやタコの真似事です」

博士がそう言うとまた、深遠に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》は綺麗さっぱり見えなくなった。博士の求める物からすれば随分レベルの低い発明品なのかもしれないが、俺から見れば、素晴らしく高性能な発明品だった。それでも、博士はどこか誇るように言う。

「多脚式ですから走破性が高く、実際の蜘蛛を参考にして、壁に張り付く事も可能にしました。これがあれば、あれらの写真を撮ることも簡単でしょう」

しかし、先輩としてはこの機械がどれくらい凄いかなど、どうでも良い事らしい。

「それでは、つい最近それを誰かに貸したという事は？」

問題は、これが本当に使われたのか。そして使われたのなら、それは誰にか、という所だった。そしてそれに対して、まず始めに疑うべきは、博士自身であろう。しかし、先輩はそんな事は微塵も思っていなかった。でなければ、『誰に貸したのか』などと聞かないだろう。つまり、先輩は、博士が実行犯では無いと信じているのだ。同じ弱小同好会のよしみ、先輩によれば部員のよしみで、お互いを信じる事は重要である。

そんな形で信頼を示した先輩に、博士はこう答えた。

「黙秘します」

「なん、ですと……？」

俺は慌てて、今までに無い、疑問系驚愕リアクションを繰り出した。

この博士の答えは、嘘を言っている訳では無いが、しかし真実を言う気も無いという事だ。これは、先輩の信頼に対する裏切りとも言えるのではないか？ だとしたら、それは許されない事だ。

俺はふつつつと怒りに震えようかと思ったが、その前に、先輩が口を開いた。

「もう一度聞く。その機器を、最近貸した事は無いのかね？」

「申し訳ありませんが、黙秘させていただきます」

「その返答は、イエス、と受け取るが。良いかね？」

「黙秘します」

三度に分かる黙秘。やはりここは俺が切れるべきか、そう思った矢先。

「では船人君、帰ろうか」

「へ？」

簡単にメモを取った先輩に、退室を促されてしまった。

「良いんですか？ ここで博士から話が聞き出せれば、それはもう真犯人に一直線ですよ？」

「ああ。博士は機器の存在と、それを誰かに使わせた事を教えてくれた。博士には博士の事情がある。それで十分ではないかね？」

「それはそうですけど、でも……」

なんだか退室する方向で空気が決まっているが、一応、本当に一応、食い下がって見る。

「何、心配ない。博士と接触できる人間は、この学校内でもごくわずかだ。すぐに見つけられるだろう」

「そういう物ですか？」

「そういう物さ。すまなかったね、博士、研究の邪魔をして。コーヒー美味しかったよ」

先輩はそれだけ言って、コーヒーカップをゴミ箱に捨てると、扉へと向かった。

「あ、えっと……。ごほん。また会おう、博士。次の“世界”の選択で。ン・ゼパラ・ロウ」

「ええ。共に、良き選択を。ミラ・ジルスト・ンダシーン」

別れの挨拶を済ませた俺は、呆れ顔のグレイを回収し、先輩の後を追う。

と、そこで、扉に手をかけた先輩が振り向いた。

「そうだ、博士。一つ、良いことを教えてあげよう」

「良いことですか？」

博士は作業の手を止めずに聞き返す。

「ああ。良い事だとも。この依頼なのだが……風香君からの紹介だ。それでは、失礼する」

先輩はそれだけ言うと、扉を開けて階段を上っていった。勿論、俺もそれに続いた。

途中、疑問に思った俺は聞いて見る。

「先輩、最後のはどういう意味ですか？」

「最後、とは？」

「風香様が噛んでいるっていう、あれです」

「ああ、あれは……。なに、すぐに分かる」

先輩はそれきり、何も言わずに階段を上っていった。

そして数分後、階段を昇りきった俺たちが扉を開けるとそこは――。

「ようこそ！ 西秘密研究所《ウエストシークレットラボ》へ！」

華々しい電飾で飾り付けられた、博士の研究所だった。部屋中がイルミネーションによって照らされ、さながら小さなパレードの様になっている。更に、部屋の奥には『歓迎！ 探偵愛好会一同！』などとも書かれていた。

おかしい。おかしい所を列挙するのも面倒なくらいおかしい。だから俺は、とりあえず、こう反応しておいた。

「くっくっく。また会ったな、博士。これが、“世界”の選択か」

「どうやらその様です。さあさあ、お二人とお一匹はこちらにどうぞ。あの事件の事なら、何でもお教えしますよ。ええ。ささ、こちらに、早く」

そしてまた、これがおかしい事の一つだが、先程までこちらを見もしなかった博士の態度は一転し、無闇に愛想良く俺たちに接した。先程はセルフサービスだったコーヒーは、何故だか豆から挽いた高級品に摩り替わっており、また、お茶請けのお菓子まで用意されていた。もちろんグレイには、ミルクと最高級猫缶が用意されている。

先輩はこの状況を分かっていたのだろう、臆すること無く、用意された席に着いた。

それにしても、なぜ博士の様子がここまで短時間で変わったのだろうか？ その答えは、実に単純な物であった。

「いや、ここまでして貰って、すまないね」

「いえいえ、滅相も御座いません。安々木様……もとい、探偵愛好会の方々に、失礼があつてはいけませんから」

今、博士の口から本音が出ましたね。

これは後から聞いた話だが、風香様の風紀委員での役割は、主に俺たちの様な同好会の監視監督なのだそう。それで過去に、少しやりすぎた博士をこらしめた事があったとか無かったとか。それ以来、博士は風香様を恐れているらしい。余談だが、その事件で博士を追い詰めたのは、先輩のお兄さんだったそう。

こうして結局、博士はこの事件に関して、知っている事を全て証言した。研究費を稼ぐ為に、機器を貸し出した事。何に使うかはお互い感知しない契約だった事。機器には、長時間バッテリーが持たず、また遠隔操作が可能な距離が短いという欠点がある事。

そして、貸し出した相手の名前は——今井自遊である事を。

「おっはようございまーす！」

特に意味も無く、上機嫌風に事務所へと出勤する俺。

今日は4月29日、昭和の日、日本国民の祝日だ。従って、授業はお休みである。おかげで、校舎の中はがらんとして人気が無く、寂しさを感じさせる。

ここ数日、確実に真犯人をあぶり出して来た俺達だが、やはり期限が短かった。泣いても笑っても、残すは今日一日。明日までに、隈吉氏の無実を証明するか、今井が真犯人だという確たる証拠を見つけなければ、隈吉氏が犯人だという事が確定してしまうのだ。つまりそれは、俺達が依頼を達成できなかった事を意味する。

初仕事にして失敗というのは、なんとしても避けたい所だ。……いや、冷静に考えれば初仕事で上手くいく方が特別なのもかもしれないが、それでも心情的には成功させたかった。だからこうして俺は、いつもの始業時間より随分早く、具体的には2時間くらい早く、登校して事務所にやってきたという訳だ。

「ああ、おはよう」

「マスター、おはようや」

それでも、先輩は先にいるのだから凄い。この人、実はこの部屋で寝泊りしているんじゃないだろうか？ グレイがそうである様に。

先輩はこんな早朝から探偵モードで、資料とにらめっこしながら、何かを書いていた。

「何か飲みますか？」

荷物を置き、仮想PCを立ち上げた俺は、自分用のコーヒーを淹れるついでに声をかけた。対して、チラ、とこちらを確認した先輩が言う。

「君と同じ物を貰おうか」

「了解です」

俺は二人分のインスタントコーヒーを淹れると、それらを先輩の席に置いた。俺自身も椅子を持ってきて、先輩のデスクの前に陣取る。すると、ついでにグレイも、先輩の机の上にやって来た。全員が顔を突き合わせ、会議っぽい雰囲気になる。折角なので、俺は先輩に聞いた。

「それで、何してるんです？」

「少しだけ、待ってくれるか」

「あ、はい」

残念ながら、袖にされてしまった。

どうやら先輩は忙しい様だ。俺が淹れたコーヒーには口も付けず、資料を作り続けている。仕方なく俺は、そんな先輩をボーッと眺める。その顔には、鹿追帽に覆われているからだろうか、少し影がさしていた。一人、黙々と資料を作る先輩。こんなに小さな体で（一部除く）、これまでたった一人、同好会を守ろうと頑張ってきたのだろう。それを想い、その懸命な姿を見るにつけ、俺は少々感じ入ってしまった。

「ぐ……ひぐっ……ぐすっ……」

「マ、マスター急にどうしたん？」

「いや、何でもない」

俺はケロリと立ち直り、ブラックコーヒーを啜った。苦かった。

先輩が顔を上げたのは、そんな時だった。

「舶人君」

気づくと、先輩は書き物を終えていた。

「我々は昨日までに、真犯人の動機と手段を揃え、偽の証拠の一片を崩した。そうだったね」

どうやら今日は、これまでのまとめから入る様だった。

「えーっと、そうですね。今井は自分でも言っていた通り、盗撮を行ってもおかしくない人間です。俺も、そんな印象を受けました。そして、今井が提示したEメール。あれが本当に隈吉氏から送られてきた物かどうか、俺達には断定できません。よって、あれをもって、隈吉氏が犯人だと言い切る事はできないでしょう」

俺は、要所要所で先輩が頷くのを確認しながら、話していく。

「そして昨日俺達は、風紀委員も掴んでいない盗撮手段を解明しました。それが、今井に貸された事もです。今井が盗撮の段階から事件に関係していた事は明らかでしょう」

「だが、それも可能性の一つの過ぎない。隠れカメラの存在と、それを貸した事実があっても、実際にそれを使ったとは限らないからね」

「まあ、確かにそれはそうです」

俺は先輩の意見に同意した。ちなみに、先輩の言う『隠れカメラ』とは、深遠に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》の事だ。どうも厨二なセンスがお気に召さない様で、先輩とグレイは、あれの事を『隠れカメラ』と呼ぶのだ。俺はカッコいいと思うんだがなあ、深遠に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》……。まあ、何故わざわざクトゥルフ神話から取ったのかは謎だが。

「しかしだ。これが示す所によれば、今井が隠れカメラを使っていたのは間違いない」

先輩は自らの発言を否定しつつ、俺とグレイに見える様に、一枚の資料を滑らせた。俺はそれを受け取って聞く。

「これは？」

「当日の今井の行動と、女子更衣室の使用状況の比較。そして、そこから推測される隠れカメラのバッテリー交換サイクルだ」

見れば確かに、二つの時系列が比較しやすい様に書かれていた。だがちょっと待って欲しい。

「今井の行動って、こんなのいつ調べたんですか？」

「君が来る前に、職員室に行っただよ。出席簿を拝借したのだよ」

ああ。また例の、いつでもどこでも入れちゃう権限を使った訳ですか。しかしそうすると、先輩は、今日いつから学校いたんだ？

「どれどれ？」

俺の疑問を余所に、今時誰も使わなそうな感動詞と共に、グレイも資料を覗き込んできた。同時に、先輩は資料の解説を始める。

「博士から聞いた通り、隠れカメラは駆動の為に大量の電力を必要とする。結果、フル稼働した

場合には、2時間しかバッテリーが持たない。その前提に立って、当日の今井の行動を見てみよう」

先輩は言いながら、資料に指を置いた。

「この通り、当日今井は2、4限目を早退、6限目に遅刻してきている。これを時間軸上に書き込むと、この通り、およそ2時間周期となっている事が分かるだろう」

確かに、授業は一回50分、休憩時間が10分だから、2限と4限での早退は二時間周期だ。6限の遅刻は、昼休憩も含めて考えれば、やはり二時間周期という事になる。

「では、翻って、女子更衣室の利用状況を見てみよう」

俺は言われるまま、女子更衣室の利用状況を見た。そして、歓声を上げた。

「おお、これは。今井の行動周期と、更衣室の空き時間が、一致している……だと!？」

そう言えば今日の俺はローテンションだな、と思って唐突にテンションを上げてみたが、得られたのはまあ、期待通りの反応だ。

「マスター、その驚き方はいらんと思うで」

「ああ、そうなのだ。この時間帯は丁度、部屋が空く。今井はこれを狙って、この時間に動いたのだろう」

グレイには諷められ、先輩にはスルーされた。

「遅刻早退の理由は体調不良となっているが、養護教諭によれば、その時間今井は保健室を訪ねていない。断定はできないが、この状況から見て、今井が実行犯である可能性は非常に高いという訳だ。まあ、この件はこれで良いとしよう」

先輩はそう言って、軽い口調で話をまとめた。

そして、これからが本題だとでも言うように、ゆっくりと話し始めた。

「さて……。もう一度確認するが、我々への依頼は、隈吉さんの無実を証明する事だったね？」

「ええ、そうです」

「その為に、我々は事件関係者に話を聞いて回った訳だが、結局、最後にして最大の謎が残ってしまった。それが何かは、分かるかね？」

勿論、分かっている。最後にして最大の謎、つまり、隈吉氏を犯人たらしめる要素。

「それは、あれですよ。あれ。そう、あれ。ほんと、あれをどうにかしないといけません」

「『あれ』じゃ分からんで」

「やだなあ、もう。流石の俺もちゃんと覚えてるって。あれはあれだろ？ つまり……ほら」

あれ、とはつまり。

「隈吉氏のパソコンから見つかった、盗撮写真の事だ」

俺があまりに引っ張るので、結局先輩が言ってしまった。

「ああ、そうですそれです。ええ、ちゃんと覚えてましたよ？ほんとに。あれがある限り、隈吉氏の盗撮犯疑惑、少なくとも盗撮に関係しているという疑惑は晴れませんよね」

「本当に覚えてたんか……？」

グレイは疑問の声を上げるが、俺はちゃんと覚えていましたよ？

そんな、俺達の高度な駆け引きには耳を貸さず、先輩は粛々と解説を進める。

「あの謎が解決されない限り、今回の依頼は達成されないだろう。そこでまず、問題点を整理

する」

言いながら、先輩は新しく別の資料を見せた。

「まず、簡単な言い方をすればこれは、“何故身に覚えの無い画像ファイルがパソコンに入っていたのか？”という問題になる。しかしこれでは漠然としすぎていて、考えを進められない。よってここで、一つの前提といくつかの事実を付け加えよう。それが、これだ」

先輩は用意した資料を指しながら、言葉を続けた。

「まず前提として、隈吉さんは本当に盗撮に関わっていないとする。こればかりは信用の問題となるが、私は信じるに値すると考えているよ。君はどうかね？」

先輩の問いに、俺は即答する。

「俺もそれには賛成です。隈吉氏は、なんというか、言動は逝ってますけど、実に誠実で神々しいまでの理想を持つ、信頼できる人だと思います」

割と本気で、俺はそう思っていた。だって、女体を語る彼からは、邪なオーラを一切感じ無かったのだから。

「ならば結構。では次に、我々が依頼を受けた日に確認した事実を付け加えよう。即ち、パソコンは一切部屋から持ち出されておらず、その部屋にも鍵が掛けられていたという事だ」

そう、隈吉氏は自分のPCに、自分以外が接触する事を避けていたはずだった。

「つまり、今回の問題は、こう言い換えられる。“真犯人は如何にして隈吉さんのパソコンに接触したのか”と。だが、この言い方も正確では無い。何故なら、接触するだけなら鍵を壊して侵入すれば良いからだ」

「まあ、確かに」

俺が頷くと、先輩は、妙な事を言い始めた

「そこで視点を変えてみよう。この問題を、隈吉さんのパソコンの視点で捉えるんだ」

「え？ 物の視点に立つんですか？」

「ああ、その通りだとも」

「まかせて下さい、そういうの得意です！」

「どんな特技やねん」

俺もそう思います。

「では一つ、例え話をしよう。舶人君、君は隈吉さんのパソコンで、私は隈吉さんだとする」

「え、何言っているんですか？ 俺は俺だし、先輩は先輩ですよ？」

「マスター、流石に分かって言ってるやろ」

うん、まあね。だって、先輩は多分気にせず続けるし。

「君は部屋に閉じ込められ、一步も外にでる事ができないとしよう。そして、その鍵は、私だけが持っているとする」

ほら、貫禄のスルーだ。……って待て待て。なんかすごいシチュエーションで例え話してますよこの先輩！？

「人が通れる秘密の抜け道は無く、鍵は私が持つ一本だけ、マスターキーの様な代替品も無い物とする。いわゆる密室だと思ってほしい。この時、君に接触できるのは私だけだ」

うわ、この先輩本当にこの仮定で話を続けるつもりだよ……。何だかゾクゾクするね！ な

んて。

「しかしある日、私が帰宅すると、部屋の中で君が死んでいるんだ。自分以外には、誰も入れないはずの部屋でね」

ふむ。この場合、俺が死ぬ事が、PCに盗撮画像がコピーされる事に対応するのだろう。先輩演じる隈吉氏としては、さぞやびっくりした事と思われる。何せ、しっかり施錠して出かけ、帰ってきた時にも施錠されていた部屋の中に、死体が転がっていたのだから。……ん？ この言い方は、つまり――。

「それは……まさか！ 密室殺人という事ですか、先輩！？」

「そうだ。この問題の本質はそこにある。すなわち――

“真犯人は如何にして密室へ侵入し、また脱出したのか”

これこそが、この問題の正しい定義だろう。そして」

先輩は、身を屈め、床に置いてあったのだろう文庫本の束を取り出した。

「ここに集めたのは、古今東西あらゆるミステリー小説の中で、密室を扱った物だ」

「な、なんだってー！？」

「今のは驚く所やないで」

いや、なんだか先輩が『こちらが3分経ったものです』とでも言いそうな、どや顔で出してきたので。つい。

そういったやり取りは当然スルーして、先輩は続ける。

「まず始めに概論だが、密室殺人は、大別して二つのパターンがある。一つは、本当に密室であり、殺人それ自体に錯覚や仕掛けを使う物。例をあげれば、被害者の部屋に、何かの仕掛けで自動発射される拳銃が設置されている場合だ。この場合、被害者自身が密室を構築している。もう一つは、殺人自体は密室で行われず、その後に密室を作り出した物だ。例をあげれば、殺人を犯した後、糸などを使って外部から鍵をかけるという物だ。この場合、犯人が密室を構築している」

なるほど。今まで密室の作り方など考えた事も無かったが、それは確かに明確な違いのあるパターンだ。

「ところが、これらの手法の中には『如何にして密室から脱出したのか』を説明するが、『如何にして密室へ侵入したのか』を説明しない物がある。ここでは、そういった手法は除外しよう」

そう言って、先輩は文庫本の山から三分の一を右に避けた。

「また今回、唯一の鍵は隈吉さんがしっかり管理し、他者には渡さなかったと言う。よって、犯人が鍵を持っていなければ実行できないものも除外する」

そう言って、先輩は更に、文庫本の山から三分の一を左に避けた。

「そしてまた、我々は隈吉さんの無罪を信じる立場にいる。よって、『殺人に見せかけた自殺』

の線も除外する」

そう言って、先輩は、残った文庫本を右側の床に下ろした。……って、あれ？

「先輩、本無くなっちゃいましたけど」

「ああ、既読の物はね。しかし——」

先輩は、先程文庫本を置いたのとは逆側の床から、新たに文庫本タワーを取り出した。

「未読の物はまだこれだけある」

その数、ざっと二十冊。

「つまり、これを今から読むと」

「そうだ」

先輩は事も無げに言うが、明日までにこれを全て読み、そこから今回の事件を説明できる理屈を構築するというのは、大変困難な仕事になると思うのだが。というかそもそも、フィクションに倣うというのは、有りなのか？

俺は色々疑問に思いつつ、タワートップの本を手に取り、パラパラとめくった。流石に本格ミステリだけあって、俺が嗜んでいる平均的ライトノベルとは、文字の密度が違う。

俺があからさまに「むむむ」などと唸っていると、先輩が言った。

「とはいえ、全てを読むことは難しいだろう。著者には大変失礼になるが、事件の概要と、そのトリックだけを順次抜き出していけば良い」

「なるほど。それならなんとかできそうな気がします」

ミステリの面白さを完全破壊してますけど。

「もしも使えそうなトリックを見つけたら、言ってくれたまえ」

「了解です」

俺は何冊かをタワーから抜き出し、自分の席に持って帰る。

そこでパラパラの本をめくりながら、ふと思いついた。

「よし 그레이、お前も手伝え」

そう、こいつにだって、本を読むことは可能なはずなのだ。しかし……。

「それは無理や」

……おかしいな、もしかして俺、人に断れやすい顔でもしてるのか？

そう思っても、こんな事で俺は狼狽えない。

「そうか。無理なら仕方ない」

「あっさり諦めすぎやろ！」

「いや、だって無理なんだろ？」

「ああ無理やで。今のうちには感覚質《クオリア》プログラムが——」

「良いって良いって、理由は聞かないから。誰にだって、言いたくない事の一つや二つあるだろ？」

「……もう、どこからツッコミを入れたら良いか分からへんな。まあ、ええわ」

そうして、 그레이は俺の机の上で、スリープモードになる。まったく、仕方ない奴だ。

さて、それでは本に集中しようか。……いや、その前に先輩に最終確認をするか。とりあえず、自然な感じで切りだして——。

「そういうことなので、俺たちだけで頑張らしましょう先ば、って、あれるえー!？」

俺が視線を向けたその先で、探偵装備を解除した先輩は、その手に本を開き……………熟睡していた。

ここは……？

「それでは、明日はよろしくお願ひします」

「はい、隈吉さんはもう。タイタニックに乗ったつもりで、どーんと構えていて下さい」

人の、話声が聞こえる。

「そ、それは……どうなんでしょう……」

「HAHAHA！ ダイジョーブ！ インディアン、ウソツカナーイ」

「そういう問題ではなく……。いえ、まあ良いでしょう。腕は確かな様ですし、後は全てお任せします。家津さんにも、お大事にとお伝え下さい」

「はい、分かりました」

一人は、船人くん。もう一人は……誰だろう。

「ああ、それと、先日の話もよろしくお願ひします」

「ええ、もう何でも来いですよ！」

「それは嬉しいですね。その件については、また連絡しますよ。それでは」

何を、話しているんだろう。

わたしがそう思った時には、もう、声は聞こえなくなっていた。

「んっ……ううん……」

今のは、わたしの声。目を開けて、周囲を見回す。初めに目があったのは、赤い首輪を付けた、三毛猫。

「おお、ボス、おはようや」

その三毛猫が、喋った。

「おはよう、グレイちゃん」

わたしは返事をしつつ思い出す。そうだ、この子の名前はグレイ。今は探偵愛好会に所属する、ネコ型ロボット。

「マスター呼んでくるわ」

グレイちゃんが、飛び降りた。そっか、今わたしは、ベットに寝てるんだ。ベットの回りはカーテンに囲まれて、多分ここは、保健室。

わたしがそれを認識しすると、そのカーテンをかき分けて、一人の男の子が入ってきた。

「先輩！ いやあ、もう本当に心配しましたよ！ 大丈夫ですか？ お怪我はありませんか！？」

彼は、わたしの後輩、船人くん。いつもいつも、どこか外した事を言う困った子。

「うん……だいじょうぶ……。ちょっと……眠いけど」

言いながらわたしは、状態を起こした。けれど。

「良いから、先輩はまだ寝ててくださいよ」

すぐにまた、寝かされちゃった。

「うん、ごめんね」

「いや、謝られる事じゃないんですけど。あ、それ変えますね」

船人くんは、わたしのおでこに張られていた、ひえピタシートをはがして、新しい物をつけて

くれる。

「聞いても良いかな？」

「はい、どうぞ」

少しずつ、頭が回るようになってきたわたしは、状況を確認する。

「何でわたし、ここに？」

「え、覚えてな……あー、いや。普通覚えて無いですよ」

「何が、あったの？」

「驚かないで下さいよ？」

わたしはただ、どうしてここにいるのかを聞いたただけなのに。船人くんはそれを、凄く大きな事みたいに言う。そして、実際に帰ってきたのは。

「先輩は、冬眠していたんですよ」

えっと、つまり……長い間眠っていたって事、かな。

「そっか……」

「それでこうして、もやしっ子を自称する俺が、先輩をここまで背負ってきた訳です」

「そっか、ごめんね」

「いえ、そんな事は良いんです。それより、グレイから聞きましたよ？ 今朝は先輩、凄く早くからいて資料の準備も良いなと思ったら、日付が変わったくらいからもう事務所にいたそうじゃないですか。しかも今日だけじゃ無く、今週はずっと、そんな感じだって。そんなんじゃ、体が持つ訳無いですよ」

「うん……」

「『活動時間は部活動に準拠する』と言いながら、自分だけ抜け駆けなんて、ずるいですよ」

「うん……」

「それと、何とは言いませんけど、ずるいですよ」

「うん……」

最後が何のことか分からないけど、自分で言った事を守っていなかったのは事実だから、わたしは何も言い返せない。

「どうして、言ってくれなかったんです？ 急に倒れるなんて展開をするなら、もっとちゃんとした伏線を事前に張らないとだめでしょう！ こんな物が〈世界〉の選択なんですか！？」

「マスター、メタで厨二な、訳わからん発言になっとるで」

こんな事を言っている船人くんだけ、本気で心配してくれていたんだと思う。だって、いつもは真意が読めない船人くんの目が、今は真剣だったから。

「ごめんなさい」

だからわたしは、素直にあやまった。

「ああ、いや別に、謝られる事じゃないんですけど。次からは、ちゃんと俺にも手伝わせて下さいよ？ 俺は助手なんですからね」

「うん、そうするよ。ところで……」

カーテンに仕切られた薄暗い空間を見回しながら、わたしは聞いた。

「今、何時？」

「ああ、えっと……」

船人くんが時計を確認する前に、グレイちゃんが答えてくれた。

「5時やで」

「え……夕方の？」

「ええ、俺の時計でも17時ですね」

船人くんと密室の謎について協議していたのは、まだ朝の9時頃だったはずだから……8時間も無駄にしちゃった！？

わたしは慌てて飛び起きようとしたけど、それは船人くんに抑えられた。

「まあまあ、落ち着いて下さい。大丈夫ですから」

「大丈夫って、もうほとんど時間が無いんだよ？ それなのに、こんな所で寝てる場合じゃないよ！」

船人くんは、こういう時に限って、どうしてこうも冷静でいられるのだろう。もうほとんど、時間が無いのに！

そうして焦りを増したわたしの耳に、船人くんの口から、信じられない言葉が飛び込む。

「いやいや、もう終わりましたから」

「どういうこと？」

思わず、私は聞き返す。

「今は、4月29日の17時では、ありません。4月31日の17時です」

4月31日……？ という事は、隈吉さんへの処分が決まってしまった！？

「ッ……………！」

わたしは、絶句してしまった。今回もまた、依頼は達成できなかったのだ。その事実、わたしは酷く落ち込み――。

「先輩！ 冗談ですよ冗談！」

船人くんに両肩を揺すられ、なんとか戻って来た。

「え……冗、談？」

「そう、イツツジョーク！ 大体、4月は30日まででしょう？ 4月31日なんて日付は有りませんよ」

「あ……」

そっか、わたし、そんな事にも気付けないくらい焦ってたんだ。

「という事で、先輩は寝ましょうね」

脱力してしまったわたしは、またベットに横になった。

「そっか、良かったよ……。って」

そしてすぐ、起き上がった。

「それじゃあやっぱり急がないと！」

「いや、だから、大丈夫なんですって」

「どうして？ まだ、隈吉さんの無実を証明する物は見つかって無いでしょ？」

早く、それを見つけないと、隈吉さんが盗撮犯に仕立て上げられちゃう。そんな事になっ

たら……！

「いえ、それならもう見つけました」

本当に依頼に失敗した事に……え？

「今、なんて？」

なんだか展開にデジャヴュを感じつつ、わたしは船人くんに聞いた。

「隈吉さんの無実は、証明できました」

「そう……なんだ」

「そうなんです。だから、先輩はまだ寝てください」

船人くんに促されて、わたしはベットに横たわった。

その後、先輩はしばらく虚空を眺めて、何かを考えている様だった。しかし、やはり疲れていたのだろう、今はまた穏やかな寝息をたてている。

まだ先輩と知り合ってひと月も経っていないのだが、こうも安心しきった顔で寝られるとは、喜ぶべきか悲しむべきか。

「それにしても、さっきは驚いたな」

「どれの事や？」

「もちろん、揺すっても叩いても、鼻の下にわさびを塗っても、先輩が起きなかった事だろ」

「わさびは塗ってなかったけどな」

とりあえず、これまでの流れを説明しよう。

事務所で先輩が眠ってしまった後、俺はしばらく、そのまま寝かせてあげていた。しかし、それから2時間、3時間と過ぎ、お昼の時間になっても先輩は起きない。揺すったり、声をかけても、全く起きないのだ。

この時、俺は本当に焦ったのだが、突然起きだしたグレイ曰く『ボスをスキャンしたけど、特に異常は無いわ。単なる過労やろ』という事だったので、なんとか落ち着きを取り戻す事ができた。ついでにこの時、グレイの所有者（大宙）の声で『おめでとう船人！ 君はグレイに隠された百八の秘密機能の一つ、健康診断ビームを発見した！』というメッセージが再生されたが、マジでそれに反応している余裕は無かった。

そんな事があって、先輩を保健室へと運んだのが5時間程前の事。ここまで先輩を背負ってくるのは、それはもう大変だった。まあ、何故とは言わないが。

しかし、本当に大変だったのは、それと平行して密室トリックを暴かないといけなかった事だ。ただでさえ沢山あった本を、俺一人で読まないといけけないのだ。あまりじっくり読んでいる事はできない。しかし、有用な情報を見落とす事は許されない。大変、緊張感のある仕事だった。そうして、途中で場所を変えつつ、俺は7時間ほどぶっ通しで本に目を通していったのだ。

それにも関わらず、先輩が用意した本が古典だからか、やたらと『氷』と『糸』が活躍する話が多く、とても今回の事件には使えそうにない物ばかりだった。

この頃になると、俺も気が滅入ってきており、『もうどうにでもな一れ』の境地がほんの少し見えていた気がする。しかしその時、今からするとちょうど一時間前、それは起きたのだ。

その時は、残った気力を総動員してパラパラと本をめくっていたのだが、突然、肩を叩かれた。初めはグレイかと思って呼びかけたが、返事は無い。それで気のせいだと判断した俺は、トリックの抽出作業に戻ったのだが、しばらくして肩に衝撃が走った。いや、そこまで強くは無かったのだが、気のせいでは済まないぐらいの強さで何か当たったのだ。何か、と言っても、その感触は容易に思い出せる。平面的で細長く、人の手ほどに柔らかくはないが鉄のように硬くもない。温かさは無かったが冷たくもなく、中身がしっかりつまった様なズシンとくる衝撃。まあつまり、俺の方にぶつかって来たのは、文庫本の背だった訳だ。それも、何の支えもなく、空中に浮かんでいる文庫本だ。

流石にポルターガイストにも慣れた俺は、「ああ、どうもすみません」と言ってさも自然な事

の様にそれを受け取った。

そして、そのポルターガイストは親切だった。俺がその本をパラパラとめくっていると、重要なページでは必ずそれが止められのた。おかげで、俺はすぐに、この事件で使えるようなトリックを見つける事ができた。

それを受けて、隈吉氏と連絡を取り、実際にパソコンも持ってきてもらい、実証実験や証拠固めを終えたのがついさっきの事だ。

そして、たまたまそれと同時に先輩は目を覚まし、そして、現在へと至るのだった。

本当に、この先輩の回りには、不可思議な事が次から次へとおこる。伏線など関係ないとばかりに、急展開の連続だ。これから密かに、この人を超展開メイカーとでも呼ぼうか。

そんな事を思いつつ、俺は先輩の寝顔を眺める。すると、先輩はどこか苦しそうな顔で、こう呟いた。

「おにい……ちゃん……」

「はいはい、おにいちゃんはいませんが、船人君ならいますよー」

俺は寝言に答える。すると先輩は。

「手……」

と言いながら、布団から右手を差し出してきた。

……まったくこの人は。そういう手繋ぎイベントは、もっと色々段階を踏んだ後に発生するものでしょうが。実は先輩は起きていて、俺をからかって遊ぼうとしてるんじゃないか。いや、こういう穿った考えは駄目だ。先輩は悪夢にうなされて、行方不明の兄を求めている。それで良いじゃないか。

そう思った俺は、先輩の手を包むように握った。

「はいはい、大丈夫ですからね」

それで、安心できたのだろうか。先輩はまた、安らかな寝息をたて始めた。

優しく微笑む兄代理と、静かに眠る妹。そんな完成された一つの風景に、グレイが横槍をいれる。

「マスター、なかなか大胆やね」

「何がだ？」

「何って、普通いきなり手を握ったりできへんで。……と、うちのデータベースには書いてある」

なるほど、グレイのいう事は正しい。俺だって、誰に対しても同じ事はできないだろう。しかし、今の俺は、ある感情を抱いているのだ。

「何ていうかさ、今俺、凄く懐かしい気分なんだ」

「懐かしい？」

そう、今俺が抱いている感覚は、懐かしさ。だから、手を握るなんていう行為も、自然とできた。

「お前は知らなかったか？ 俺にはさ、昔、妹がいたんだ。ほんと、先輩に似てちっこくて、可愛くてな。昔は『おにいちゃん、おにいちゃん』と、俺の後ろをついてきたもんさ。ところが、

数年前にな……」

「マスター、それって……？」

俺は、表情を暗くする。

「俺に対して態度が冷たくなってなあ……」

「生きとるんかい！」

流石はグレイ。今回の事件で1、2を争う質の良いツッコミをありがとう。

「ああ、もちろん健在だよ。だがなグレイ」

俺は可能な限りの眼力を持って、グレイを見据えた。

「もう会えない事と、会えるけど相手にされない事、どっちが辛いと思う？」

「……」

あら、この問いはグレイには難しかったか。というか、俺にだって分からん。やめやめ。

「なんてな。全部嘘だ」

「嘘かい！」

「いや、それも冗談だ」

「どっちやねん！」

そうそう、俺達はこうでないと。

空気も乾いた所で一つ、気合を入れておこう。

「じゃあ、明日は頑張るか」

「うちは留守番やけどな」

「なに、それも立派な仕事だ」

先輩の体調は、明日までに回復するかは分からない。だがまあ、その時はその時。どちらにせよ、決戦は明日だ。

だからそういう事は(ry

先輩熟睡事件から一夜開けた今日、4月30日。隈吉氏への処分が決定される日。時刻は、6限目が終了してすぐ。場所は、〈家津探偵事務所〉。

「あ、先輩。体調の方は大丈夫なんですか？」

珍しく先に到着していた俺は、事務所に入ってきた先輩を出迎えた。

「うん、もう大丈夫。昨日はごめんね」

「いえいえ、俺は楽しかったですよ？先輩の看病するの」

懐かしい気分に浸れましたからね。

「楽しかったの……？」

「ええ、とても」

「そ、そうなんだ。ありがとう」

俺の言葉を、先輩がどう受け取ったのかは分からない。しかしまあ、悪くは取られていないだろう。

「さ、先輩、準備してください」

「そうだね」

先輩は事務所の奥へと進み、戻ってきた時には、いつもの探偵モードになっていた。

「では、行こうか」

「イエッサー！グレイ、留守は頼んだ」

俺は勢いよく返事をして、ソファから立ち上がる。

「まかしときい……」

一方、机の上でまるまったグレイは、眠そうに答えた。こいつもう、完全に怠けキャラ付いてるな……。まあ良いけどさ。

目指すは、委員会室。目的は、隈吉氏の弁護。やるのは、俺達！

「〈世界〉の選択に抗う為に、我々は今、旅立つ！」

謎の掛け声と共に、俺は勢いよく扉を開き――。

「はっはっはっ！ここから先は通さんぞ！」

すぐに閉めた。

「どうした？船人君」

「いえ、なんか今、変な人達がいた様な……。見間違いかな……」

俺は眉間に手を当てて俯き、疲れている人を演出する。

「どれ、私が開けよう」

そんな俺が変わって、先輩が扉を開け――。

「ふっふっふっ！そうだ！貴様らがここから出る事はできん！」

すぐに閉めた。

その様子を後ろから見守っていた俺は呟く。

「やっぱり、いましたね……」

「その様だね……」

そこには、黒い全身タイツに身を包み、爆弾マークの覆面をつけた、謎の集団がいたのだ。どう見ても変質者、よくて悪の組織の下っ端だった。

「何なんです、彼ら？」

俺が当然の疑問を口にすると、先輩は、面白い事を言った。

「そうか。彼らが、〈リア充爆発しろ団〉か」

「えー……？ 何なんですか、その愉快的な団体は」

「〈リア充爆発しろ団〉、通称〈リア爆団〉。その実体は謎に包まれているが、現在はあの今井をトップに据える、秘密組織だよ。そして、今回の冤罪事件を仕組んだ組織でもある」

「な、なんだってー！」

そんな、たった今ここで作りました、みたいな設定出さないで下さいよ。ほんと、昨日『ちゃんと伏線は貼って下さい』って言ったばかりでしょう！？

「先輩、それも俺がいない間に調べた事ですか？」

「まあ、裏を取ったのは君がいない時だったが、きっかけは違う。ほら、覚えているかね？ 三日前、ここでポルターガイスト現象が起きたらろう？」

三日前というと……ああ、俺が初めてそれを体験した日ですね。

「あの時落下したファイルは、兄が調べた要注意人物・組織の一覧でね。偶然開いたページが、〈リア爆団〉のページだったのだ」

「なんという事でしょう……」

俺が騒いでいる間に、そんな事があったとは。まあ、そうだとしても、俺から見たらパッと出の組織なんですけどね。

俺がそう思っていると、先輩はコートの中をガサゴソと探り出した。

「さて、ここで話し合っても、埒が明かないな。なんとかここを突破しないといけないのだが……ああ、あった」

そうして先輩が取り出した物に、俺は見覚えがあった。

「それは、閃光手榴弾的な何か」

「ああ、これで彼等を無効化しよう」

それは前の事件で、グレイ達を無力化するのに使用し、結局効果が無かった物だ。

「効くんですか？」

「これでも、博士謹製の武器だ。効かない方が異常なのだよ」

そうだったのか。博士の事だから、また厨二な名前付けてるんだらうなあ。

先輩は、その閃光手榴弾的な何かのピンを抜くと、扉を少しだけ開け、すぐに閉めた。

「はっはっはっ！ どうし——」

直後、廊下に響く爆発音。

それを聞いた俺達は、すぐに廊下の様子をうかがう。そこでは期待通り、リア爆団の面々が苦しそうに悶えていた。少し、可哀想でもある。

「よし、行こう」

「了解です！」

俺は感傷を振りきり、リア爆団の面々を飛び越えるようにして、包囲を脱出しようとした。しかし、外周部にいた何人かは十分なダメージを与えられなかったらしい。

「くっ、行かせんぞ！」

「しまっ……」

俺は足首を掴まれ、引き倒される。

このシチュエーションは……美味しい！

「先輩！ 俺の事は良いから！ 先に行ってください！ 早く！！」

「そういう訳にも……行かないだろう」

そう言う先輩の手には、いつの間にか、拳銃タイプの麻醉銃が握られていた。

「さあ、行こう」

「え？ あれ？」

そして、いつ撃ったのだろうか。俺の足を掴んでいたリア爆団の下っ端は、大きな寝息を立てていた。

俺は慌てて立ち上がり、先行する先輩を追う。すると先輩は、廊下の角を曲がった所で、急停止していた。

「どうしたんです——」

「はっはっはっ！ 第一包囲網を突破したぐらいでいい気になるな！ 奴らは我々リア爆団の中でも最弱！ ここから先は俺達が——」

スパパパパ。

「うおおおお！ 必殺、サブマスイガン！」

「くっ……見事……だ。……パタ」

「では、行こう」

今起こった事の解説。1、廊下を曲がった先にまたリア爆団の面々がいました。2、相手はどこかで聞いたような口上をあげようと思いました。3、先輩はそれを無視してサブマスイガンを乱射し始めました。4、無表情で乱射する先輩の代わりに俺が雄たけびを上げました。5、最後の一人が妙にノリ良く倒れました。6、そんな彼には一瞥もくれず先輩は歩を進めました。

ほんと、先輩はボケ殺しだよ。

その後も、何度かリア爆団のメンバーに遭遇したが、先輩お得意の催涙系武装でことごとく無効化しながら、俺達は行軍を進めた。

この戦いは多数の一般生徒にも目撃され、後に先輩は〈ゴキバスターPro〉という微妙な称号を送られる事になった。由来には諸説あり、黒い全身タイツというのがゴキブリっぽいからとか、リア爆団の活動自体がゴキブリ並に目障りだったからとか言われている。

そうして俺たちは、委員会室のある事務棟3階へと到達する。

「くそ、奴らを止め……Zzz」

「何としても団長をお守り……Zzz」

「もっと！ もっと撃って……Zzz」

「キリがないな……少しまずいか」

もっと他にコメントすべき事があった気がしますよ、俺は。でも、先輩が触れないのなら、

俺も触れない。

「ええ。と言うか、何人かは復活して来てるんじゃないですか？」

「ふむ。私の麻醉銃は、人体への危険が少ないように、効果が弱めに設計されているからね」

ああ、そういう配慮はしてあるんですね。博士もああ見えて、仕事は真面目にやるタイプって事ですか。

そしてついに、隈吉さんのいる委員会室が、目前に迫った。

「ここが最終防衛ラインだ！」「奴らは絶対に通すな！」「でも、撃たれたい！」わらわら、わらわら.....。

まったく懲りない人たちだ。こちらには先輩がいるんだぞ？ 何度来たって無駄な物は無駄なんだよ。

そう思って、俺はその場でふんぞり返っていた。

初めの内は、それでも良かった。先輩はこれまで通り、麻醉を連射して、敵の前衛を切り崩してくれたから。

だが、ある時、その弾幕が止む。

「ど、どうした.....？」「う、撃たないのか？」「早く！ 早く下さい！」ざわざわ.....ざわ...
...ざわ.....！

その唐突な変化に、リア爆団の面々も戸惑っているようだ。そう、これは戸惑っているんであって、決して期待している訳ではありません。

「どうしたんですか？ さっきまでみたいに、シュパパパ！ っと、やっちゃって下さいよ」

不審に思った俺は、先輩を見る。そして、先輩は言った。

「すまない船人君.....弾切れだ」

「な、なんだってー！？」「そんな馬鹿な！？」「もうあの感覚は味わえないのか！？」「ちくしょう！ ちくしょう！」「うおー！」

それに過敏に反応したのは、リア爆団の面々であった。この俺を超えるスピードでリアクションを取るとは、恐るべしリア爆団.....。

しかも、リア爆団は立ち直りも早い。

「だが、それならそれで結構」「全員、構え！」

嘆きの姿勢から一転、俺たちを取り押さえようとスクラムを組む。

「総員.....確保！！」

やばい！ 一斉に飛びかかってくるリア爆団から逃げる為、俺は踵を返した。しかし、その先には。

「そうはいかへんで！」

「クッククッ.....これが、〈世界〉の選択ですよ」

キリッとした顔のグレイと、悪役笑いが板につく、博士の姿があった。

「貴様、博士！ 裏切ったのか！？」

それを見た、リア爆団の面々は一時停止する。一部は猫又グレイに面食らっている様子（とい



っても覆面で見えないの)だが、大半は博士の方を向いていた。

しかし、博士は彼らを見殺しした。

「これを使いなさい」

博士はただそれだけ言い、先輩にガスマスクを投げ渡した。

「マスターはこれや！」

一方俺には、グレイから金魚鉢型のヘルメットが投げられる。

何なんだこのデザイン……。しかし、四の五の言っている状況じゃない。俺は躊躇せずにそれを被る。途端、なにやら爽やかな香りが漂い初め、実に快適に呼吸ができるようになった。これも、宇宙一の技術力が成せる技なのだろうか。

そんな俺達の様子を見て、リア爆団も危険を察知したのだろう。俺たちの確保を優先する者、標的を博士に変更した者、逃げ出す者。各人様々な対応を取ったが、どれも皆、遅かった。

「チェックメイトです。くらいなさい、第0世界の瘴気《Miasma in the root world》！」

博士は厨二センスを炸裂させると同時、白衣のポケットから左右三つずつ、計六つの真っ黒な玉を取り出し、リア爆団に向けて投げつけた。

それは、床に着くや否や大量の黒煙を撒き散らし、あたり一面をすっかり闇で満たしてしまう。

「だから、なんでそんな妙な名前付けるんや……」

グレイはそう言うが、要は効きさえすれば良いのだ。そして、流石は博士が直々に使うだけの事はある。ヘルメットの外からは、苦しそうに咳き込む声すら聞こえない。その煙は、吸い込んだ者の意識を、一瞬で奪いさったのだ。

「すまない博士」コーホー「舶人君、今のうちに」コーホー。

ガスマスクを着けているせいか、異様な呼吸音を立てつつ、先輩が俺を促す。

「了解です」ゴポゴポゴポ。

よくよく聞いてみれば、俺の金魚鉢からもおかしい音がでているが、そんな事を気にする俺ではない。

そうして俺たちは、一気に、委員会室に駆け込む。

途中、視界の片隅には、携帯を操作する手が見えた。

風紀委員会の委員会室、そこに踏み込んだ俺たちが初めて見たものは、

「すみませんでした！ 全部、僕が仕組んだ事です！ 本当に、申し訳ありませんでした！！」
土下座で謝る、今井の姿だった。

えっと……。え？ もしかして、俺たち来た意味無かった？

「なるほど、聞こうか」

対するは……。誰だろう？ 部屋の入口にいる俺ですら、威圧感を感じる男が一人、今井と対峙していた。

その時、俺たちの登場に気づいた風香様が、こちらにやって来る。

「お二人とも、遅かったのですね」

「ああ、この通り、トラブルに巻き込まれてね」

「あらあら」

廊下を確認した風香様は、その惨状を一言で流し、扉を閉めた。

「とにかく、今回はお疲れ様でした」

「結局、最後は自白の様だが」

「千沙さん達が調査を進めているという事実が、自白を促したのでしょう」

「だと良いがね」

そう言って、先輩は肩をすくめた。

「とにかく、こちらへどうぞ」

風香様は、今井と威圧感の男を横から見られる位置に、俺たちを座らせた。これは元々、俺たちの為に用意されていた席なのだろう。探偵ルックのちびっ子と、金魚鉢を被った男が現れても、特に大きな反応はなかった。

そして多分、この席は、隈吉氏の弁護団席でもある。俺たちの対面には風紀委員が多数陣取っているし、左手側には苦笑いを浮かべた隈吉氏が座っている。そしてその反対、右手側には威圧感を持った男が座っているのだ。その配置は、ニュースやドラマで見られる、法廷にそっくりだった。

ついでに、それら全ての中心で、今井は土下座していた。

俺は着席してすぐに、右手側、威圧漢……。もとい、威圧感を指して聞く。

「あの、風香様、あちらの方は？」ゴポゴポゴポ。

「我々の委員長です」

なるほど、通りで。そりゃあ威圧感の一つや二つ持っているだろう。

「あと、なんで今井さんがここにいるんですか？」

「ある程度、千沙さんからお話は伺っていましたので。わたくしが連れてきました」

なんとまあ、手際のよろしく事で。

粗方の状況を把握した俺は、今井の話に耳を傾ける。

「皆さんご存知の通り、写真を校内の恵まれない男子たちに分け与えようとしたのは僕です。それは、残念ながら阻止されてしまいました」

乗っけから表現がマイルドですね。 그레이がいたらきっと、
“なんでそんな慈善事業みたいな表現やねん”

ってツッコミいれられてますよ。……って、ん？ 空耳か？ ついに俺もヤキがまわったか？

「今、何か聞こえた様な」

“その金魚鉢には、通信機能もついとるからな”

「なんだ、そうなのか」

それなら仕方ない。先輩は既にガスマスクを外している為、俺が一人だけ妙に浮いているけど、それも仕方ない。

今井の話は続く。

「しかし、そこで僕が捕まってしまっは、この事業が潰れてしまいます」

“つぶれても構へんわ”

그레이のツッコミも続く。

「ですから、苦渋の選択ではありましたが、事前に用意した策を使う事にしたんです」

「君が、風紀委員に示したというメールの事かね？」

すっかり隈吉氏の弁護団になりきった先輩は、遅れて入って来た身だというのに、躊躇せず発言していく。

そしてその問を、今井はきっぱりと認めた。

「はい、それも一つです。あのメールは、僕が偽造しました」

俺の考えは、正しかった訳だ。

「そうしてあなたは、他人に罪を被せようとした訳ですか。なぜ、その対象が隈吉さんだったのですかな？」

「一つには、動機が説明しやすい事があります。本人の前で言うのも気が引けますが……隈吉さんには、悪い癖がありますから」

それを聞いた隈吉氏は、ただただ苦笑いをするしかない。

「ですが、それだけではありません。もう一つ、個人的な恨みもあります」

その発言に、場は静まり返る。ただ一人、先輩だけが、変わらぬ様子で聞いた。

「うかがっても、よろしいですか？」

「詳しくは言いませんが、まあ、その……失恋、ですよ。ただの逆恨みだという事は分かっていますが、それでも、穏やかでいられるほど、僕は大人では無かったんです……」

“人間っていうのは難しい生き物なんやね”

「まあな」

これには、隈吉氏も難しい顔をしていた。

そんな重苦しく空気を払い退ける様に（実際には気にしていないだけだと思うが）、先輩は話題を修正する。

「つらい話をさせてしまった様ですな……。では、話を戻しましょうか。その偽装メールは、どの様に作ったのですかな？」

「それ自体は簡単ですよ。多少Eメールの知識があれば、すぐにできます」

続けて、今井は具体的なやり方を説明したが、それは要するに俺の予想した方法と同じであった。即ち、ヘッダ情報を偽装しただけであったのだ。

「なるほど、良いでしょう。では次の質問ですが、盗撮はどうやって行ったのですか？」

これには、対面にいる風紀委員の皆さんが興味津々といった様子になった。ここは風紀委員内でも意見が分かれていた所なので、やはり気になるのだろう。一方で俺達は、深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》の存在を知っている。だからこれは、この裁判みたいな物を進める為の、単なる形式的な質問である。いや、形式的質問のはずであった。しかし、その返答は――

「あれは、僕が一人で隠しカメラの設置と回収を繰り返しました」

「そんな馬鹿な!？」

“なんやて?”

予想外の返しに、俺は慌てて驚愕リアクションを引き出したのだが、多少精彩を欠いた感じになってしまった。一方で、対面の風紀委員達は「ほら、やっぱり」とか「いや、でも……」とか言い合いながら、今井に具体的な質問をしていく。

その間に、俺は小声で呼びかけた。

「グレイ、博士はそこにいるか？」

“ああ、おるで。今は〈研究所〉に引き上げとるからな”

「それじゃあもう一回確認するが、あの写真は間違いなく、深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》で撮った物なんだよな」

ややあって、俺の耳に博士の声が聞こえてくる。

“ええ、その通りですよ。あの後、深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》を調べましたが、撮影されたデータの断片が残っていましたからね”

「センキュー博士」

俺は、今のやり取りを先輩に伝える。ついでに、金魚鉢に通信機能が付いていた事もだ。

「……という事なんですけど、今井はどういうつもりなんでしょう」ゴポゴポゴポ。

「さあ、現段階ではわからないね……。しばらく様子を見るところでしょう」

まあ、それも一つの手か。

さて、こちらが少し混乱している間に、あちら側の事情聴取は終わった様だ。

「――という形で、盗撮は僕一人で行ないました」

「なるほど、確かにそれで説明できそうだ」

風紀委員を代表して、委員長が応えた。

俺達の調査によれば、通常の定点カメラでは実現出来ない写真が多かったのだが……。

しかし先輩は、『様子を見る』という宣言通り、その件にはまだ触れないつमोरりのようだ。

「私も納得しました。しかし、疑問はまだあります」

「僕に答えられる事であれば、なんでも」

「まず、写真の販売会を企画したのは、あなたで間違い無いのですかな？」

先輩は、外周部から探りを入れるように質問していく。

「はい。間違いありません。僕が一人で企画しました」

「なるほど」

その返答に、先輩は何かを考えた顔になった。しかしそれも一瞬で、すぐに次の質問に移る。「販売会には多数の生徒が参加していた様ですが、どうやってあそこまでの人数を集めたのですかな？ しかも、風紀委員に知られずに」

「探偵さんには既に話しましたが、全て口コミです。僕は、僕が信用できると思った人だけを誘いました。そしてその人達が、各々信用に足る人物を誘って来た。それだけの事です。どちらにせよ、主催は僕一人で、組織的な展開をした訳ではありません」

「なるほど。内容が内容ですからな。信用で成り立っていたのであれば、風紀委員にバレない様に拡散していく事もあるでしょうな」

そんなはずはないだろう。俺にはそんな話は流れてきていないし、噂として流すには危険すぎる。これまでの状況から考えれば、販売会の参加者は、十中八九リア爆団の連中だ。

先輩だってそれくらい分かっているだろうに、何故それに付き合っているのか。

俺のいらだちをよそに、先輩は表情を変えず、次の件に進んでしまう。

「それでは最後に、多分、この場にいる皆さんが気にしている事を聞きましょうか」

元々静かだった部屋が、さらにシンと静まり返った。普段の俺だったら必ずボケに行く、そんな空気だ。しかし勿論、先輩はそんな事をしない。

「隈吉さんのパソコンから出てきた盗撮写真。あれは、何なのですか？」

そう、これこそが、今回の事件の肝とも言える問題だった。

だがしかし、この件に関して俺は、その手段に関する推測と、それ証明する物的証拠を握っているのだ。嘘の証言などしようものなら、すぐにでも反論してやろうという決意が、俺にはあった。

しかし今井は、やはり、嘘をついた。

「あれは、僕が後から仕込んだ物です」

「それは、いつの事ですか？」

「メールの偽装工作を行った日から三日後の事です。身体測定の日から考えると、五日後になります」

「いや、待ってください。それは――」

当初の決意通り、俺は異議を申し立てようとする。

しかしそれは、先輩に止められてしまった。

「舶人君、とりあえず最後まで聞こう」

まあ、先輩がそういうのであれば……。今は、抑えましょう。

俺は黙って、先輩に従った。

「あ、はい。すみません。続けてください」ゴポゴポゴポ。

「ごほん……。なるほど、身体測定から二日後、ですか。もう少し詳しい時間は分かりますかな？」

「ええっと……。あれは放課後、部活動が活動している時間帯です。その時間に、僕は隈吉さんの部屋に忍び込みました」

「え？」

驚いたのは、隈吉氏だった。まあ、それはそうだろう。自分の部屋に忍び込んだと言われれば、だれだって驚く。

しかし、それは置いておいて、先輩は先を促す。

「それは、どうやって？」

「ああ、はい……」

そう言って、今井はポケットをあさりだしたかと思うと、小さな工具を取り出した。

「これを使いました」

「それは？」

「ピッキングツールです」

「なるほど、そうやってあなた自身が直接、データをコピーしたと。そういう訳ですか」

「はい。それが、今回の事件の全てです。僕が一人で、全てやりました」

なるほどな。なんて、納得はできない。その説明にも、色々問題がある。まず、寮の扉をピッキングで開けるなど、不審者にも程がある。手際良く済ませなければ、途中で誰かに見つかってしまうだろう。更に去り際には閉めていくとなれば、尚更だ。そして、部屋に忍び込めたとして、隈吉氏のパソコンにログインできないはずだ。昨日直接確認させてもらったが、隈吉氏のパソコンには、しっかりログインパスワードが設定されていた。何らかの手段でこれを突破しない限り、データをコピーする事はできない。

まったく、先輩もいつまでこんな茶番に付き合うつもりなんだ？ 盗撮は博士の深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》、参加者はリア爆団、冤罪工作は俺のつけた方法。これで間違いないんだよ。何せこっちには物証があるんだ。負ける訳が無い。いい加減我慢も限界だ。俺は言うぞ。せーの……。

異議あり！——。

そうと言おうとした俺の肩を、それまで後ろで状況を見守っていた、風香様が掴んだ。

「考え直されませんか？」

あまりにも唐突な言葉に、俺は意味が分からず聞き返す。

「え、何をですか？」

「今仰っしゃろうとした事をです」

……どういう事だ？ 何かを発言しようとした事、それ自体を止められるなら、まだ分かる。だが、この人は、発言しようとした内容まで把握している節がある。一体全体、どうなっているんだ？ そういえば、前日も〈ラフ〉でこんな事があった様な……？

そんな風に混乱している俺に、先輩も気づいた様だ。

「どうしたのかね？」

「いえ、渡無さんが……」

風香様は先輩の耳に口を寄せ、先輩にだけ聞こえる様に、何事かを呟いた。いや、そうしたつもりなのだろうが、どういう訳か俺の頭の金魚鉢は、ばっちり音を拾っていた。

“——真実を告発しようとしていたのです”

ああ、やっぱり、風香様は俺の考えまで読んでいる。何なんだ？ 風香様が自称するOMD《

オンミョードー》には、人の考えを言い当てる術でもあるのか？

しかし、これは聞こえなかったはずの音なので、反応する訳にはいかない。

対して、それを聞いた先輩言う。

「なるほど。舶人君、風香君の言うとおりのだ。止めておきたまえ」

探偵の先輩が、真実を明かさない事を勧める……？

「え？ どうしてですか？」

俺の疑問に、先輩は、こう返した。

「真実を明かす事が、正義とは限らないのだよ」

真実を言う事が、正しいとは、限らない……？ この先輩は何を言っているんだ？ 探偵と言うのは、真実を明かす事が仕事じゃないのか？ 真実とは、この世で最も尊い物じゃなかったのか？ それが、正義ではない？

納得が行かない俺に、先輩は言葉を重ねる。

「それを明かす事で、君以外の誰か一人でも、幸せになるかな？ そして明かさない事で、君は不幸になるのかな？」

俺以外の、幸せ？ 俺の、不幸？

……………ああ！ そうでしたそうでした！ いけねえいけねえー。そうさそうさ。今回、一部とはいえ自分自身で真実を探りだした所為で、それを披露したいという思いが勝っていましたよ。危ない危ない。はっはっはっはっ。いやー、まいったまいった。まったく、そんな事を忘れるなんて、舶人君のお馬鹿さん」

先輩の言葉で急速に冷静さを取り戻した俺は、状況を整理し直してみた。

真実は先程書いたとおり、盗撮が博士で、参加者はリア爆団で、偽装は俺の推測した方法だ。

一方今井の証言では、盗撮は今井で、参加者も今井が集め、偽装も今井がやったという事になっている。

なんだ、こう書けば、今井の考えは一目瞭然じゃないか。そして先輩は、これに気づいていたのだ。

「先輩、まさか今井は……？」

「ああ。多分彼は、全ての罪を一人で被るつもりだ」

か、漢《おとこ》だ……。

今井がそれだけの覚悟を決めている時に、俺は自身の薄っぺらい自尊心を満たす事しか考えていなかったなんて……。恥ずかしいやら感動やらで、お兄さんもう泣きそうだよ。

しかし、そういう事なら、相分かった。不肖、渡無舶人。全身全霊をかけてその心意気を汲もう！

「そ そうだったのか。たったひとりで そこまで やりきるとは すごい おとこだ。でも つみは つぐなわないと いけませんよ」ゴポゴポゴポ

“すごく ぼうよみ や”

グレイめ、なかなか高度なツッコミをしおって……。

※

俺たちの意見がまとまった頃、場の收拾を見て取った委員長が、まとめに入る。

「他に、意見のある者はいないか？ ……いないようだな。それでは、判決を申し渡す」

あ、やっぱりこれ、裁判形式だったんだ。

「まず、隈吉。君は、無罪だ。迷惑をかけてすまなかった」

「ははは、疑いが晴れたのなら、それで十分ですよ」

流石はいけメン四天王の一人。爽やか笑顔で、度量の広さを見せつけた。

「次に、今井。君は我が校の女生徒の尊厳を踏みにじるばかりか、半分とは言え、その罪を他人に被せようとした。これは、許されざる行為だ。しかし、最後にはそれを自白し、反省の色も見える。よって、君には——」

今まさに、判決が言い渡される、そんな時。風紀委員の中でも、一番後ろに座っていた男子生徒が一人、立ち上がった。

「委員長！」

「何だ？」

「えっと……俺が……ました……」

「何だって？ よく聞かないぞ」

その男子生徒は、勢い良く立ち上がったものの、どこか踏ん切りがつかないようだ。

「その……」

「意見があるならはっきり言え」

「はい、あの、その……俺がやりました」

委員長は、眉をひそめる。

「何をだ？」

その間に、男子生徒は意を決して答えた。

「隈吉さんのパソコンに写真データを入れたのは、俺なんです！」

その告白に、室内、というか主に風紀委員達は騒然とする。

しかし、最も焦ったのは、他ならぬ今井だ。

「お前、何を……ごほん。一体何を言っているんだ！？ 委員長、さっきも言ったとおり、偽装工作は僕がやったんです！」

今井は必死で、知らぬ存ぜぬを通す。

「いえ、委員長。実際に工作を立案、実行したのは、俺です！ 今井さんを裁くのであれば、俺も一緒に！！」

一方その男子生徒は、今井の横で土下座を始め、自分の非を叫ぶ。

「僕がやったんです」

「いや、俺が！」

そうして謝り合戦が始まろうという時、バンッ！ と、大きな音を立てて扉が開かれた。それは、部屋中の人間の注意を集めるには、十分な物だった。

「話は全て聞かせてもらった！！」

そして、俺たちの注目を集めたのは——リア爆団の面々だった。もちろん、黒い全身タイツに爆弾マークの覆面、というスタイルはそのままで。

ついに力づくで今井を助けに来たのかと思い、俺は一瞬緊張する。しかしよく考えれば、風香様がいる時点で、その心配は無用だった。事実、彼らは怒涛の勢いで部屋に雪崩れ込むと、綺麗に整列して、一斉に土下座を始めたのだ。その数、ざっと30人以上。

その様を見て、皆（主に一般風紀委員のみ）があっけにとられている間に、先頭にいた覆面が口上を述べる。

「委員長！ この方はただ、我々持たざる者の事を想い、少し行動が行き過ぎてしまっただけなのです。我々の様な者がいなければ、こんな事はしなかった。だから悪いのは、この方では無く、我々です！ だから、裁くのであれば、我々を！ 我々を裁いて下さい！！」

「「「「「お願いします！！」」」」」」

「お前たち……」

振り返った今井の目には、涙が溜まっていた。

突然の訪問者はそれだけでは終わらない。

「委員長、僕からもお願いしましょう」

今度は俺の背後から、少年の声が聞こえてくる。何事かと驚いて振り向けば、そこにいたのは、博士だった。

「は、速い……！」

“そんな、格闘漫画で後ろを取られたみたいだな……”

ああ、うん。ちょっと反応間違ったかな。

そうして突然現れた博士の目的も、やはり、今井の擁護だった。

「今回、技術的に彼をバックアップしたのは、この僕です。実現する手段を与えた僕にも、責任の一端があるでしょう。彼だけが責任を負うのは、フェアではありませんね」

「博士……君まで……」

博士は、深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック＝ナチャ》の事を伏せつつも、自分の非を認める気のようなだ。なぜか態度は上からだが。

この流れは、まだ止まらない。次に手を挙げたのは、隈吉氏だ。

「委員長、僕からもお願いします。これだけの人間に慕われている今井君です。根っからの悪人ではないのでしょうか。それに、今回はちゃんと自分から非を認めてくれました。盗撮は確かに許され無い事です。ですが少なくとも、僕に罪を被せようとした件に関しては、水に流そうと思います」

「く、隈吉……お前にまで……。ぼ、僕は……」

ああ、流石いけメン四天王の隈吉氏。度量の広さがハンパない。

共犯者や関係者、被害者にまでも擁護された今井。これが、侠気の連鎖か。正しい意味で、俺は胸が熱くなる。

「皆……」

今井が部屋中を見回すと、リア爆団が、博士が、隈吉氏が、それぞれ頷き返した。なんだかすごく感動的場面に見える。

「他に、意見のある者はいないか？ ……よし、今度こそいいな。それでは、判決を申し渡す」

今井やその支持者、そして俺の肩の上にいるらしい紐手が、息を飲む。

風香様や風紀委員は、ただ黙って委員長の判断を待つ。

俺と先輩はもう、置いてけぼり過ぎて、どうにでもなれという空気を発している。

そして――。

「今、申出た者は全て、自主停学一週間。その間、毎日グラウンド100周、または安佐木君による私刑とする」

全くもって全然、罰は軽くなりませんでしたとさ。

「しかし……茶番でしたね」

「こういう事もあるよ」

裁判もどきも終わり、事務所に戻ってきた俺たちは、のんびりと紅茶を啜っていた。

先輩は既に、探偵装備を解除している。

「わざわざ博士にまで来てもらって、なんとかこうとか突入したと言うのに……。あ、あの時は助かったぞ、 그레이」

「お安い御用やで～」

答える 그레이 は、俺の机で丸くなっていた。

「あ、そういえば 그레이 ちゃん。なんで、あんなにタイミング良く来てくれたの？」

「ああ、あれな。うちはほら、あれや」

그레이 はそう言いながら、この部屋に取り付けられた監視カメラに視線を向ける。

「そういや、お前はあれが使えるんだったな。となると、博士はお前が呼んだのか？」

「それはまた別や。博士は、例の隠れカメラで、マスター達を追跡しとったらしいわ」

なん……だと……。そんな事になっていたなんて、露にも思っていなかった。

「そっか。追跡されてたっていうのは、あまりいい気分じゃないけど、でも、助かったよ。博士くんには、今度なにかお礼をしなくちゃね。もちろん、 그레이 ちゃんにも」

「ええってええって。うちはこの会の一員なんやから。友情は見返りを求めない、ってうちのデータベースに書いてあるし」

お前……。それ絶対、大宙の受け売りだろ。

「あ、そうだ 船人くん」

先輩は思い出した様に、机から紙を一枚取り出し、俺に渡す。

渡されたのは、〈調査報告書〉の表紙だ。

「これ、よろしくね」

「了解です」

今回の事件は登場人物も多く、事実関係も複雑だった。その辺りをどうまとめようかなどと思いつきながら、俺はそれを受け取る。

すると先輩は、おもむろに切り出した。

「でもね、今回の報告書を完成する為には、まだ足りない物があるの。それが何か、分かる？」

「いえ、全然分かりません」

俺は即答した。

「少しは考えようや」

그레이 も即ツッコミを返した。

「船人くんは疑問に思わなかった？」

先輩は何一つ意に介さなかった。

「いや、特に何も。もう俺は、今井の侠気が眩しすぎて」

「うん、そんな、男気(?)を持っていて、あれだけの人に慕われる今井くんの事を、誰が通報

したのかな？」

「え、それは……」

確かに、言われてみればその通りだ。写真の販売会は、今井をリーダーとするリア爆団が、内輪向けに開催した物だと考えられる。だとすれば、その中の誰かが風紀委員に通報したという事になるが、そんな事をする理由が思い当たらない。自分たちの組織を、あれだけ慕われる今井を、売るとは思えない。

しかし、そう言う先輩は、悩んでいるという表情ではない。その、どこか誇った様な表情から察するに……。

「先輩は、何か思い当たる人がいるんですね？」

そして、その考えは合っていたらしい。先輩がはにかむ様な笑顔になる。

「えへへ、まあね。実は——」

トン、トン、トン。

丁度その時、事務所の扉が叩かれた。

ここからが良いところだというのに、邪魔をされてはかなわない。俺は外に聞こえる程度に、声を張り上げた。

「入ってまーす！」

「嫌な返しやな……」

すると、扉の外にいた人物は「失礼致しました。ではまた後ほどお伺い致します」と、立ち去ろうとする。

その声と言葉遣い、何より、俺のボケに乗っかってくるその反応。間違いなく、風香様だった。

俺は先輩を見るが、その目は『早く中に連れてきなさい』と言っている気がした。

俺はすぐに、扉に向かう。

「ああ、すみません。今開けます、開けますから！」

「あら、よろしいのですか？」

「勿論ですよ。ささ、どうぞどうぞ」

俺は風香様を招き入れた。

「いらっしやい、風香ちゃん。舶人くん、お茶の用意をお願い。」

パーティションの奥から出てきた先輩は、風香様を出迎え、応接用ソファを勧める。

しかし風香様は、それを断った。

「いえ、今はただ一言、お礼を言いに来ただけですので、このままで結構です」

「お礼だなんて、そんな、結局わたし達は何もしてないのに」

先輩は胸の前で手を振って、謙遜を示す。

「いえ、それは違いますよ。今井さんは初め、容疑を否認していましたから」

「え、そうなんですか？」

「はい。ですが、千沙さん達が来る直前、今井さんは一度だけ携帯を確認しました。今井さんが態度を一変させたのは、それからです」

そうか、そうだったのか。だとすれば、第0世界の瘴気《Miasma in the root world》の中で見た、携帯を操作する手。あれが、今井へ合図を送っていたのだろう。

「そ、そうだったんだ」

先輩はまたさっきの、はにかんだ笑顔を見せる。探偵として、ちゃんと誰かの役に立たてた事が嬉しいのだろう。

「それで本題に入りますが……」

風香様はそう言うと、喉をおさえて、何度か咳払いをした。そして、喉に手を当てたまま、風香様がしゃべると――。

「「今井を悪の道から救ってくれてありがとう」」

風香様の声に重なって、聞いたことの無い男の声が聞こえた。

一体何がどうなっているのか。俺は、俺にできる精一杯で、目を白黒させる。多分、はたから見たら、気持ち悪い。

そんな俺に、先輩はさらなる追い打ちをかけた。

「こちらこそ、調査を手伝ってくれてありがとう」

その一言に、風香様（とそれに重なった声）は息を飲む。

「「……！ 気づいていたのか」」

「え、あ、う、え……？」

俺としては、訳が分からないのはいつもの事なので、目だけでなく口もパクパクとしておいた。

「ふふん。これでもわたし、探偵だからね」

「「そうか。ならば、余計な手出しだったかも知れないな」」

「ううん。そんな事無かったよ。今回は時間が無かったから。本当に助かったよ」

「「そうか。まあ俺も、友の為に、出来る事をしたかっただけだ。気にするな」」

「それでも、ありがとう」

「「ふん……」」

先輩の言葉に、風香様はいつもの優雅さとは程遠い不器用な笑みを浮かべると、喉に当てていた手をおろした。

「どうやら、わたくしから言う事は無い様ですね」

「あはは、ごめんね」

「いえ、助かります。あの集団が皆、わたくしによる私刑を選択しまして。これから、30人以上を、死なない程度に痛めつけないとなりませんので」

「うん、じゃあ、またね」

「では、失礼致します」

先輩に見送られ、風香様は事務所を出て行った。

「あうあうあー……」

「舶人くん、どうしたの？」

「はっ!？」

先輩に呼びかけられ、俺は正気に戻る事にした。

先輩は既にパーティションの奥に引込み、グレイと戯れている。

俺は速やかに、自分の席に戻った。

「ボスー、今のは何なんや？」

「今のは風香ちゃんに憑依した、紐手《ひもて》くん。ちょうど、さっき話そうとした事につながるんだけど。紐手くんはね、今回の事件のきっかけ、販売会の情報を風紀委員に通報した人でもあって、この部屋でポルターガイストを起こしていた張本人なの」

「な、ななな、ぬあんだって——！？ いつ、そんな事調べたんですか！？」

俺は、今の俺にできる、最大限の驚きを表現した。

「初めに気づいたのは、博士の研究所に行った日かな。あの時ね、ふと思ったんだよ。リア爆団の事、隠れカメラの事、これってわたし達が気づいたんじゃないで、ポルターガイストに気付かされてるな、って」

なんと。そんなメタ視点で物を見ろとは、流石先輩と言わざるをえない。

「それでわたし、この事件に関係していそうで、ポルターガイスト現象が起こせそうな人を探したの」

「普通、そんなんおらんで」

「普通はね。でも、この学園は普通じゃない。いたんだよ。条件に合う人が」

「それが……」

「そう、ひと月くらい前に、女子生徒に交際を断られたショックで意識不明に陥った、紐手さん」

「※○△■×●！？」

意味不明すぎて、俺は日本語ですらない音で驚きを表現した。

「そんな理由で意識障害になれるんか……。地球人は凄いな」

いえ、普通はなれません。

「それで、調べれば調べるほど、紐手さんとこの事件が繋がっていったの。紐手さんは、リア爆団に所属こそしていないけど、今井さんとは幼なじみで親友同士。女子生徒が紐手さんとの交際を断った理由は、その娘には別に好きな人——隈吉さんがいたから。そんな具合にね」

「な、なるほどー」

俺はもう、ただひたすら、言われた事を事実として受け入れる体制に入る事にした。

「それでね。初めの話に戻るんだけど、この事件の全貌を説明する為の最後のピース。それが、紐手さん、って事なの。紐手さんは、盗撮が行われていた事も、その販売会が開かれる事も、隈吉さんへの冤罪工作も、全部見ていたんだよ」

「そ、そーなのかー」

「うん。そういう事だから、うまくまとめてね？」

先輩は、仕事をやりきった顔で言った。

「あー、はい……」

対して俺は、もうどうにでもな一れ、の境地に達している。

ガタ、ガタ。

「ん？」

その時、俺は扉の外に気配を感じ、緊張状態を取り戻した。

「どうしたの？」

「いえ、ちょっと……」

俺はそーっと扉に近づき、耳を澄ます。

「これは……思わぬ収穫を得てしまったな」

「ああ、紐手は全てを見ていた、という事はつまり」

「「楽園にも入っていた」という事だ」

「だが、一体どうやって？」

「馬鹿野郎、聞いてなかったのか？ 紐手は人に憑依できる状態にあるんだぞ？」

「そうか、つまり……」

俺はそーっと、扉を開けた。

「「幽体離脱すれば、覗き放題って事だ！！ ……ぐはあー」」

そこでは、未だ覆面をかぶった男が二人、風香様に吹き飛ばされていた。その声が妙に嬉しそうなのは、世紀の大発見をしたからだだろう。決して、風香様に殴られたからではありません。

「すみません。この方々は私刑執行を待ちきれず、わたくしを探しに来たらしいのですが、入れ違ってしまった」

「ああ、いえいえ、お気になさらず」

俺は極めて社交辞令的返事をする。

「この二人はこちらで引き取りますので。改めて、失礼致します」

風香様は二人の男を引きずって、事務棟の方へ歩いていった。

俺は落ち着いて、自分の席に戻る。

「風香ちゃんも大変だね」

まあ、人間を躊躇無くぶん殴れる精神をしている訳ですからね。これまで大変な人生だったんでしょう……って、そういう事じゃないか。

「受刑者達、喜んでますからね」

流石の俺も苦笑いするしかない。

そうして、お茶に戻ろうとした時、またまた、事務所の扉が叩かれた。まったく、今日は賑やかな日だ。

トン、トン、トン。

「はいはい、ただいま開けますよ！」

急いで扉を開けた、その先にいたのは――。

「あ、渡無さん。例の件ですけど、これからどうですか？」

裸体大好き、変態紳士のいけメン四天王、隈吉紳司だった。

反省文的な何か

俺は鳥頭か？

前回は報告書を小説風にしてしまい、『改めて書き直さないといけない』と言ってたのに、気づけばまた小説風になってるよ。

馬鹿なのか俺。

まあそれはそれとして、今回も見事に脈略とか伏線とかすっ飛ばされた、ひどい事件だった。博士やリア爆団の唐突な出番、突然倒れた先輩、憑依までして出てきた紐手さん。

特に、最後の紐手さん登場のくだり。あれはあまりにも唐突すぎた。もしこれが、俺の完全オリジナルなフィクション作品だった場合、紐手さんの存在を知らせる要素がもっと前に必要だったろう。そうでないと、『話に整合性の無い糞シナリオ』と評価されて終わっている所だ。まあ、これは事実を元にしたノンフィクションであり、どこかに公開する訳でも無いので、これで良いんだけど。

そうそう、あの後数日経って、博士が事務所を訪ねてきた。

曰く、風紀委員との間に極めて高度な司法取引があり、深淵に待ち受ける蜘蛛《アトラック=ナチャ》を差し出す事で刑を免れる事になったそうだ。しかし、どうせ納品するならと、欠点の改良を行っていたらしい。

その改良案の中に、無線LAN経由での操作システムがあり、IT関連部分の協力者として俺を訪ねてきたのだ。博士を気に入っている俺は、二つ返事で承諾、ノリノリで改造を手伝った。結果として、学校内であれば無制限に行動でき、携帯のブラウザ経由でも操作できる、深淵に待ち受ける蜘蛛・Σ《アトラック=ナチャ・シグマ》が完成したのだ。

現在それは風紀委員で重宝され、近々、同モデルを探偵愛好会にも納品してくれるそうだ。博士は態度が不遜なだけで、案外良い奴なのかもしれない。

他には……ああ、思い出した。

結局今回、俺最大の見せ場が作れなかったんだ。こんな場所なので、いや、だからこそ。あの時俺が何を発見し、どうやって主張を崩すつもりだったのか、きっちりと書いておこう。

まずは、どうやって隈吉さんのパソコンにデータが仕込まれたのか。割と有耶無耶になってしまったが、これは、あの場で風紀委員の一人が自供した方法が正しい。つまり、風紀委員という自身の立場を使い、捜査のふりをして部屋に堂々と侵入し、その場でデータを仕込んだのだ。

それに気づけたのは、例の、俺にぶつかってきた本のおかげだ。あの本で使われたトリックは、『密室の中で被害者は生きていて、初めに突入した人物がそれを殺した』という、こう書くとかかなり強引な物だった。しかし、今回の方法は、正にそれだったのだ。

これに対して、他人の目が有る中、どうやってばれずにデータを写したのかという疑問が沸くだろう。これは推測でしかないのだが、例えば、一昔前に流行った『USBメモリをさすだけで感染するウィルス』と同種のプログラムを使ったのではないだろうか。もっと単純に、目を盗んで頑張ったのかもしれない。

そんな推測しかない状態で、どうして俺は、この方法を使ったと断言できるのか。それは簡単な話で、隈吉氏のパソコンに、風紀委員が調査を行っているその時間、見知らぬUSBメモリがさされたという記録が残っていたのだ。これは何も隈吉さんが特殊なソフトを起動していた訳ではない。あまり知られていない、というか意識されていないが、実はパソコンは自分にさされたUSB機器の情報を内部に保存している。その確認方法はちょっと検索すれば出てくるのが割愛するが、それを見れば、メモリのハードウェアIDや初めて刺された日など、詳細な情報が得られるのだ。

以上。そんな感じで、必要とあらば該当風紀委員所有のUSBメモリなどを証拠物として差し押さえてでも、犯人を特定するつもりだったのだが。結果は既に見た通りである。

まったく、数少ない活躍の場を取られて、俺は悲しいよ。

それと、これも書いておかないと。

俺は、先輩が倒れた事を心底心配したし、それと同じくらい、尊敬もしたんだよ。マジで。それだけ、先輩は頑張ったって事だと思ったからさ。

ところがだ、よくよく聞いてみたら、調査らしい調査をしていたのはほんの少し。実際にはその時間の大半を、あの「密室分類」の資料読みに使っていたらしい。資料読みというとそれらしいが、要は小説にはまっていただけである。本人曰く、『初めはそんなつもりじゃなかったんだけど、読み始めたら止まらなくて』だそうだが……。

先輩なので許す。

以上、今回の事件に関して、まとめるべきはこのぐらいか。

終わって見れば、変態芸術家に、天才厨二小学生、紳士の集団と幽体離脱中の男。とにかくおかしい人達ばかりで楽しい事件だった。

ますます、この学校が気に入ったよ。

追伸

最後に訪ねてきた変態との間に何があったかは、詮索しないで下さい。俺の中では、既に黒歴史に葬りました。

本当のあとがきです

読者の皆様。

お世話になっております。伊南鴉雀です。

今回はこんな作品をお読みいただき、ありがとうございます。

皆様に一言、どんな意味でも良いので、「それは無いわ」と言わせられたら、この作品的には成功です。

そして、ごめんなさい。今回、相方link君がうまく時間が取れなかった為、絵の枚数が少なくなっています。ついでに文章と絵が違う様に見えるかも知れませんが、多分気のせいです。このあたりの連携不足も今後の課題かと思えます。今回の所は、どちらが真実だったのか、あなたが決めてください。

さて、唐突ですがここで、「イマ充」という言葉を提唱します。作中でも章タイトルで使わせて頂いた「イマ充」。これは、イマジナリーが充実している、つまり想像力が充実している状態を指し、リア充の対義語になります。ちなみに説明するまでも無いと思いますが、リア充とは、リアルが充実している人、を表す用語です。広義には文字通りの意味になりますが、狭義には交際相手がいる人の事を指している様です。

そういう狭義の「リア充」に対して、「イマ充」は存在します。

「俺には/私には、彼女/彼氏はいないけど、そんな物は必要ない。なぜなら、俺達には/私達には画面の中に、いや、想像の世界に、俺達の脳内に、彼女/彼氏がいるからだ！」

そういう気概の人を、私は狭義の「イマ充」として定義したいと思えます。その域に達していなくても、日々創作物を消費し、それを心から楽しめている人であれば、広義の「イマ充」と言えるでしょう。

イマ充ライフも捨てた物じゃありません。何せ想像の世界ですから、可能性は無限大です。これからも、楽しく健全に、イマ充ライフを謳歌しましょう！

最後に、多分誰にも気づいて貰えないと思うので書きますが、今回のラストシーン。あれ実は、file1.5で伏線を張ったつもりです。ええ、つもりなんです。お暇であれば確認してみてください。

以上、もしも次がありましたら、その時に。

2010年12月 伊南鴉雀